



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報 告 書 2024

2025 年 3 月

F D 部会

はじめに

今年度のFD活動において、特筆すべきことは多くはない。各部局がいつも通りの着実な活動をしたと総括して良い。もちろんFDアンケートの結果をつぶさに見れば、改善すべき点がないわけではないが、「アンケートの点数が良いこと＝FD活動が上手くいっている」ということではない。常に変化する学生の要望を把握することで、大学として対応していくことが本義であるので、仮にアンケートの結果、良くない項目があったとしても、むしろ改善点が見つかったと評価すべきだろうと考えている。そういう意味では、次期中期計画に授業評価の点数に関する数値目標が入ったことは、今後のFD活動の方針変更が求められるかもしれない。今後のFD委員の皆様に、議論を続けていただきたい。

他方、IR活動については、それほど盛り上がったとは言えない。一つには、個人情報への保全の観点から、踏み込んだ分析が難しいこともあるだろう。ただ、今後も進む少子化に伴う厳しい環境を考えると、IR活動の重要性はますます高まっていくと予想される。私自身の怠慢を棚に置いて発言することが許されるのであれば、先進事例の研究や研修活動も、部会の活動に加えていただけると幸いだ。

他方、構造面では新設を含め、いくつかの制度改変を行った。一つは、FDアンケート項目の一つである「学生の感想」の部局内共有に関するルールの確認である。一面で、学生の要望を共有することで、部局全体として改善策を考えることができる面がある一方で、個人的な軋轢が、そのまま部局内とは言え公開されるおそれもある。そのため、今後も慎重な運用がはかられる必要があろう。

もう一つは、学期途中で学生の授業改善意見のフィードバックの新設である。これは、新年度に入ってもまずは「試行」から入ることになるが、教員はもちろん学生にとっても、「さまざまな回路が増えただけ」という事態にならないようしないといけない。これまでもあった、ごく短期的な要望への対応と、FDアンケートによる長期的な要望への対応の中間的な役割が求められる。更に、「つぐみ意見箱」との棲み分けの工夫も必要であろう。2024年度委員の先生からも、懸念も含めてさまざまな意見が出てきた。そのどれもがもったいなかったので、今後の試行プロセスの中で、着地点を見つけていくことになるだろう。

最後に、本部会の運営にご尽力いただいたメンバーの皆さん、また授業評価アンケートの企画・運営や本報告書の整理・編集、会議の準備にご尽力いただいた教育推進課の吉田主事、本報告書をまとめていただいた中曽根企画主査に深く感謝するとともにここに記しておきたい。

2025年3月

2024年度教育研究委員会FD部会 FD部会長 廣瀬弘毅

目 次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1. 1 委員の構成	1
1. 2 事業の実施状況	1
1. 2. 1 授業評価	1
1. 2. 2 授業公開	13
1. 2. 3 F D 研修	13
1. 2. 4 実施要項	13
2. 各部局のF D 活動	
2. 1 経済学部	
2. 1. 1 授業評価	16
2. 1. 2 授業公開とゲスト招請授業	18
2. 1. 3 授業改善についての課題と展望	20
2. 2 生物資源学部	
2. 2. 1 授業評価	22
2. 2. 2 授業公開の方針と実績	23
2. 2. 3 授業改善活動についての課題と展望	24
2. 3 海洋生物資源学部	
2. 3. 1 授業評価アンケート	26
2. 3. 2 授業公開	26
2. 3. 3 授業改善についての課題と展望	27
2. 4 看護福祉学部	
2. 4. 1 授業評価	29
2. 4. 2 F D 研修	32
2. 4. 3 授業公開	32
2. 5 学術教養センター	
2. 5. 1 授業評価アンケートの結果	37
2. 5. 2 授業公開の方針と実績	38
2. 5. 3 F D 研修	39
2. 5. 4 授業改善の取組みと今後の展望	40
2. 6 情報センター	
2. 6. 1 アンケート結果と授業評価	44
2. 6. 2 F D 活動	47
2. 6. 3 授業改善の取組み	49

1. 活動概要

1.1 委員の構成

2024 年度の F D 部会メンバーは、以下の 7 名の教員である。

2024 年度 F D 部会委員名簿

氏 名	所 属	職	役 割
廣 瀬 弘 毅	経済学部	教 授	委 員 長
新 宮 晋	経済学部	特 命 教 授	委 員
植 松 宏 平	生物資源学部	准 教 授	委 員
瀧 澤 文 雄	海洋生物資源学部	准 教 授	委 員
普 照 早 苗	看護福祉学部	准 教 授	委 員
石 原 一 成	学術教養センター	教 授	委 員
村 田 知 也	情報センター	准 教 授	委 員

1.2 事業の実施状況

1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果、経年特性（前期、後期）を次頁より掲載する。

令和6年度 学生による授業評価の実施結果

（前期）実施期間 令和6年7月1日（月）～ 7月25日（木）（ただし授業の都合等により一部期間外実施）

調査票対象・回答状況

＜学部＞	回答数	対象数	＜大学院＞	回答数	対象数
経済学部	1,320	4,761	経済・経営学研究科	0	24
生物資源学部	187	965	生物資源学研究科	19	93
海洋生物資源学部	474	1,468	看護福祉学研究科	6	9
看護福祉学部	714	2,061	健康生活科学研究科	0	0
学術教養センター	2,423	6,969			
情報センター	215	616			
キャリアセンター	0	0			
計	5,333	16,840	計	25	126

参加教員

＜学部＞	実施人数	実施率	＜大学院＞	実施人数	実施率
経済学部	25 人	92.6 %	経済・経営学研究科	0 人	0.0 %
生物資源学部	14 人	77.8 %	生物資源学研究科	5 人	71.4 %
海洋生物資源学部	19 人	95.0 %	看護福祉学研究科	1 人	100.0 %
看護福祉学部	28 人	87.5 %	健康生活科学研究科	1 人	100.0 %
学術教養センター	16 人	100.0 %	キャリアセンター他	0 人	0.0 %
情報センター	5 人	100.0 %	非常勤講師	0 人	0.0 %
キャリアセンター他	6 人	85.7 %			
非常勤講師	34 人	68.0 %			
計	147 人	84.0 %	計	7 人	50.0 %

参加科目

＜学部＞	実施科目	実施率	＜大学院＞	実施科目	実施率
経済学部	51 科目	89.5 %	経済・経営学研究科	0 科目	0.0 %
生物資源学部	17 科目	68.0 %	生物資源学研究科	5 科目	55.6 %
海洋生物資源学部	30 科目	96.8 %	看護福祉学研究科	1 科目	100.0 %
看護福祉学部	43 科目	86.0 %	健康生活科学研究科	0 科目	0.0 %
学術教養センター	112 科目	78.9 %			
情報センター	13 科目	100.0 %			
キャリア教育科目	0 科目	0.0 %			
計	266 科目	83.6 %	計	6 科目	42.9 %

令和6年度 学生による授業評価の実施結果

(後期) 実施期間 令和6年12月17日(火)～令和7年 1月29日(水)

(ただし授業の都合等により一部期間外実施)

調査票対象・回答状況

<学部>	回答数	対象数	<大学院>	回答数	対象数
経済学部	1,036	4,106	経済・経営学研究科	21	29
生物資源学部	283	870	生物資源学研究科	5	35
海洋生物資源学部	385	1,338	看護福祉学研究科	0	0
看護福祉学部	380	1,681	健康生活科学研究科	0	0
学術教養センター	1,428	3,928			
情報センター	22	136			
キャリアセンター	0	0			
計	3,534	12,059	計	26	64

参加教員

<学部>	実施人数	実施率	<大学院>	実施人数	実施率
経済学部	29 人	93.5 %	経済・経営学研究科	3 人	100.0 %
生物資源学部	16 人	80.0 %	生物資源学研究科	2 人	66.7 %
海洋生物資源学部	18 人	94.7 %	看護福祉学研究科	0 人	0.0 %
看護福祉学部	20 人	83.3 %	健康生活科学研究科	0 人	0.0 %
学術教養センター	16 人	100.0 %	キャリアセンター他	0 人	0.0 %
情報センター	3 人	100.0 %	非常勤講師	1 人	100.0 %
キャリアセンター他	5 人	100.0 %			
非常勤講師	14 人	77.8 %			
計	121 人	89.0 %	計	6 人	75.0 %

参加科目

<学部>	実施科目	実施率	<大学院>	実施科目	実施率
経済学部	86 科目	83.5 %	経済・経営学研究科	4 科目	80.0 %
生物資源学部	18 科目	75.0 %	生物資源学研究科	2 科目	66.7 %
海洋生物資源学部	26 科目	96.3 %	看護福祉学研究科	0 科目	0.0 %
看護福祉学部	28 科目	71.8 %	健康生活科学研究科	0 科目	0.0 %
学術教養センター	77 科目	87.5 %			
情報センター	4 科目	100.0 %			
キャリア教育科目	0 科目	0.0 %			
計	239 科目	83.9 %	計	6 科目	75.0 %

福井県立大学 授業に関する調査

本アンケートは以下の講義用です。アンケートに回答する前に確認してください：

○○学部・○○講義1・○○氏名

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育をより良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックし、Q6については自由に記述してください。

本アンケートによる（全学、学部別等）授業評価結果は、本学ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を御覧ください。

回答を1回に制限するためgmailアドレスでログインしてもらっていますが、誰が記入したのかは分からない設定になっています。教員にはアカウントは通知されませんので、このアンケートの回答が成績に影響することはありません。

なお、アンケートの集計業務は、守秘義務契約を結んだ外部業者に委託しております。

福井県立大学 授業に関する調査

@g.fpu.ac.jp [アカウントを切り替える](#)



共有なし

* 必須の質問です

授業に関する調査アンケート項目

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育をより良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックし、Q6については自由に記述してください。

Q1 この講義（課題、レポート、予習復習を含む）に意欲的に取り組みましたか？ *

- ☐ 1 意欲的に取り組まなかった
- ☐ 2 あまり意欲的に取り組まなかった
- ☐ 3 ある程度意欲的に取り組んだ
- ☐ 4 意欲的に取り組んだ

Q2 この授業についての方法（先生の講義の方法、話し方、資料の提示方法、学習支援システム・遠隔システムの活用など）はどうでしたか？ *

- ☐ 1 不適切である
- ☐ 2 やや不適切である
- ☐ 3 まあまあ適切である
- ☐ 4 非常に適切である

Q3 この授業の内容はどの程度理解できましたか？ *

- ☐ 1 理解できなかった
- ☐ 2 あまり理解できなかった
- ☐ 3 ある程度理解できた
- ☐ 4 理解できた

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか？ *

- ☐ 1 高まらなかった
- ☐ 2 あまり高まらなかった
- ☐ 3 少し高まった
- ☐ 4 高まった

Q5 この授業を総合的に評価してください *

- ☐ 1 良くない
- ☐ 2 あまり良くない
- ☐ 3 まずまず良い
- ☐ 4 良い

Q6 この授業について、その方法、教材、授業内容など、良かった点・悪かった点・気づいた点を自由にご書いてください（この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します）。

回答を入力

Q7 教員設定の質問・選択式（該当授業のみ）

- ☐ 1
- ☐ 2
- ☐ 3
- ☐ 4

Q8 教員設定の質問・記述式（該当授業のみ）

回答を入力

福井県立大学 授業に関する調査

j-tsutsumi@g.fpu.ac.jp [アカウントを切り替える](#)



共有なし

遠隔授業に関する調査アンケート項目

この科目を、完全に（または主に）遠隔で授業を受けた学生にお尋ねします。
あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックしてください。

遠隔で授業を受けなかった方は回答不要になります。そのまま次へ進んでください。

Q9 遠隔で行われた授業について、遠隔システムの活用（資料の提示方法、フィードバックのあり方等）はどうでしたか？

- ☐ 1 うまく活用されていない
- ☐ 2 あまりうまく活用されていない
- ☐ 3 まずまずうまく活用されている
- ☐ 4 うまく活用されている

Q10 遠隔で行われた授業について、学習の効果はありましたか？

- ☐ 1 効果がなかった
- ☐ 2 あまり効果がなかった
- ☐ 3 ある程度効果があった
- ☐ 4 効果があった

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。
以下に、集計結果の見方を記す。

集計数	前期：回答された全てのアンケート 後期：回答された全てのアンケート
Q1 から Q5/Q9、Q10	アンケートの Q1 から Q5 並びに Q9、Q10 に対応
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差
集計方法	上段 回答選択肢「1、2、3、4」をそれぞれ「1 点、2 点、3 点、4 点」と得点化。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を示す。 下段 設問ごとに母標準偏差を求め、回答者の選択肢に対する偏り度合いを数値で下段に示す。但し、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。 「―」の欄は有効回答が無かったことを示す。
〔集計グループ〕	
全体	全ての集計対象者
部局別	当該学部には所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
履修登録者数別	履修登録者数が「100 人以上」「100 人未満」別に集計

令和6年度 前期 学生による授業評価全体集計結果(学部生)

集計グループ (集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体 (5333)	3.43 0.69	3.51 0.63	3.32 0.65	3.37 0.72	3.57 0.63	3.43 0.83	3.33 0.85
部局別 (5333)							
経済学部 (1320)	3.40 0.73	3.51 0.62	3.32 0.63	3.36 0.71	3.56 0.61	3.44 0.84	3.34 0.85
生物資源学部 (187)	3.36 0.63	3.47 0.60	3.19 0.70	3.26 0.72	3.50 0.61	3.56 0.65	3.27 0.96
海洋生物資源学部 (474)	3.19 0.73	3.21 0.92	3.04 0.81	3.15 0.93	3.30 0.93	2.90 1.08	2.88 1.06
看護福祉学部 (714)	3.54 0.63	3.62 0.52	3.35 0.60	3.50 0.59	3.67 0.51	3.65 0.60	3.58 0.57
学術教養センター (2423)	3.48 0.66	3.55 0.59	3.39 0.61	3.42 0.68	3.62 0.56	3.44 0.80	3.33 0.85
情報センター (215)	3.38 0.66	3.38 0.66	3.12 0.72	3.12 0.82	3.38 0.74	3.61 0.68	3.55 0.65
3599							
規模別 (1734)							
100人以上 (1734)	3.37 0.74	3.47 0.70	3.28 0.69	3.31 0.77	3.51 0.70	3.37 0.90	3.26 0.92
100人未満 (3599)	3.46 0.66	3.53 0.60	3.34 0.63	3.40 0.69	3.60 0.59	3.46 0.78	3.37 0.81

令和6年度 前期 学生による授業評価全体集計結果(大学院生)

集計グループ (集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体 (25)	3.56 0.70	3.64 0.48	3.28 0.45	3.44 0.57	3.56 0.57	3.53 0.75	3.33 0.58
部局別 (25)							
経済・経営学研究科 (0)	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —
生物資源学研究科 (19)	3.58 0.75	3.68 0.46	3.32 0.46	3.42 0.59	3.63 0.48	3.46 0.84	3.25 0.43
看護福祉学研究科 (6)	3.50 0.50	3.50 0.50	3.17 0.37	3.50 0.50	3.33 0.75	3.67 0.47	3.50 0.76
健康生活科学研究科 (0)	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

令和6年度 後期 学生による授業評価全体集計結果(学部生)

集計グループ	(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体	(3534)	3.45 0.68	3.57 0.57	3.39 0.60	3.44 0.66	3.64 0.56	3.48 0.76	3.41 0.79
部局別 (3534)								
経済学部	(1036)	3.46 0.68	3.55 0.58	3.38 0.60	3.48 0.65	3.61 0.56	3.45 0.78	3.38 0.87
生物資源学部	(283)	3.39 0.68	3.51 0.60	3.27 0.65	3.33 0.67	3.60 0.56	3.50 0.79	3.39 0.85
海洋生物資源学部	(385)	3.27 0.60	3.51 0.56	3.22 0.60	3.32 0.72	3.55 0.57	3.56 0.58	3.49 0.57
看護福祉学部	(380)	3.60 0.60	3.64 0.54	3.44 0.54	3.61 0.50	3.72 0.47	3.68 0.53	3.57 0.59
学術教養センター	(1428)	3.46 0.70	3.59 0.56	3.44 0.59	3.44 0.67	3.67 0.57	3.41 0.83	3.36 0.82
情報センター	(22)	3.55 0.50	3.59 0.58	3.09 0.67	3.41 0.58	3.59 0.49	3.61 0.49	3.56 0.50
規模別 (3534)								
100人以上	(998)	3.40 0.68	3.53 0.56	3.37 0.58	3.39 0.67	3.61 0.56	3.39 0.82	3.31 0.88
100人未満	(2536)	3.47 0.67	3.58 0.57	3.39 0.60	3.46 0.66	3.65 0.56	3.51 0.73	3.45 0.75

令和6年度 後期 学生による授業評価全体集計結果(大学院生)

集計グループ	(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	Q9遠隔システム活用	Q10遠隔授業の効果
全体	(26)	3.42 0.88	3.50 0.69	3.42 0.69	3.58 0.57	3.65 0.68	3.14 1.10	3.32 0.92
部局別 (26)								
経済・経営学研究科	(21)	3.33 0.94	3.48 0.73	3.38 0.72	3.57 0.58	3.62 0.72	3.00 1.19	3.24 1.00
生物資源学研究科	(5)	3.80 0.40	3.60 0.49	3.60 0.49	3.60 0.49	3.80 0.40	3.60 0.49	3.60 0.49
看護福祉学研究科	(0)	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —
健康生活科学研究科	(0)	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

重要項目の経年特性（前期）

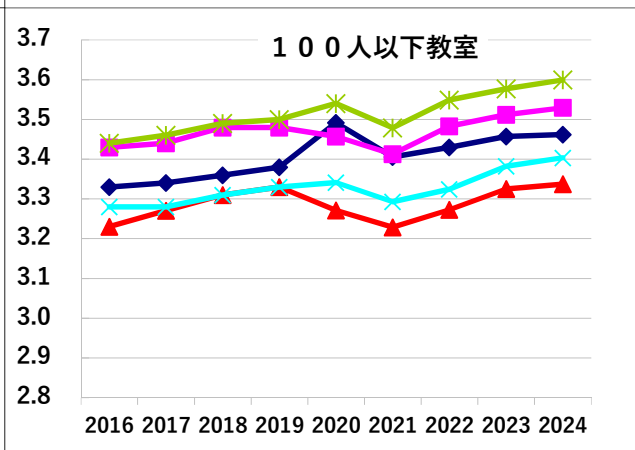
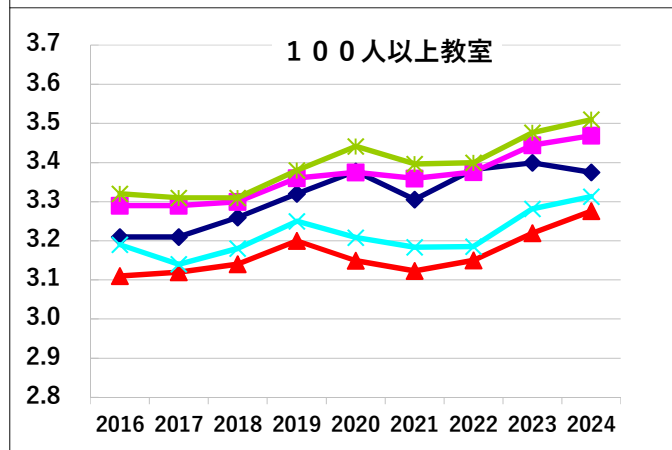
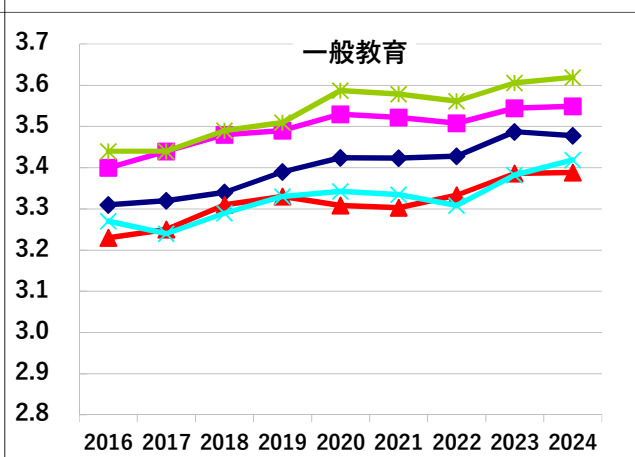
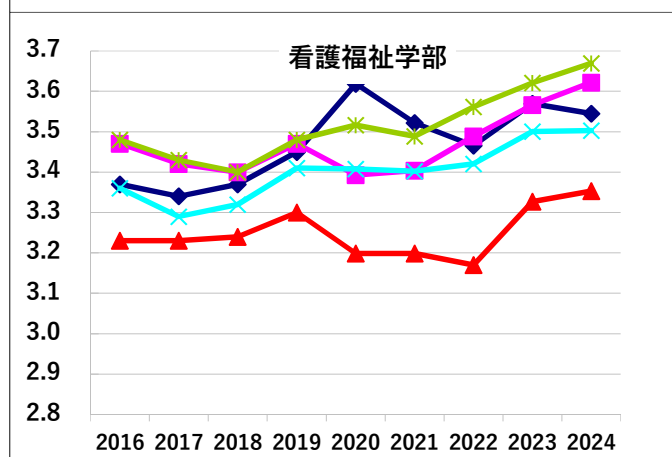
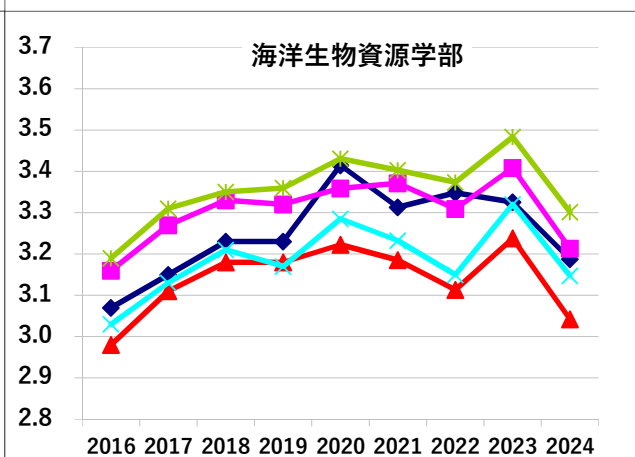
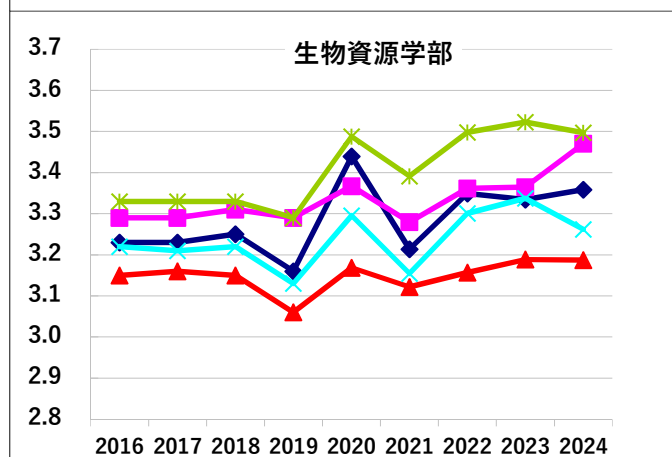
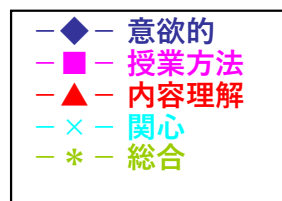
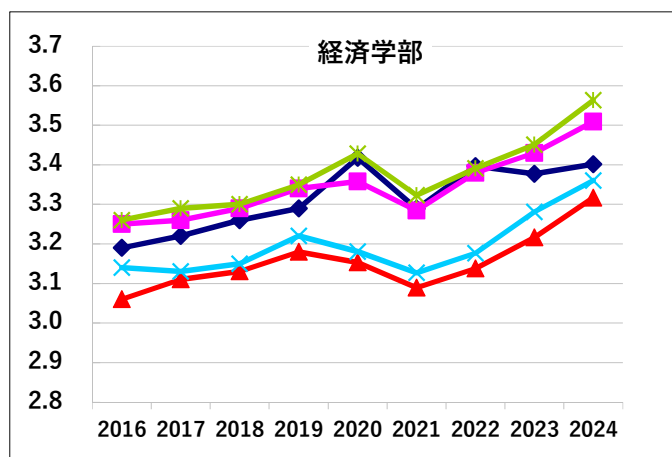
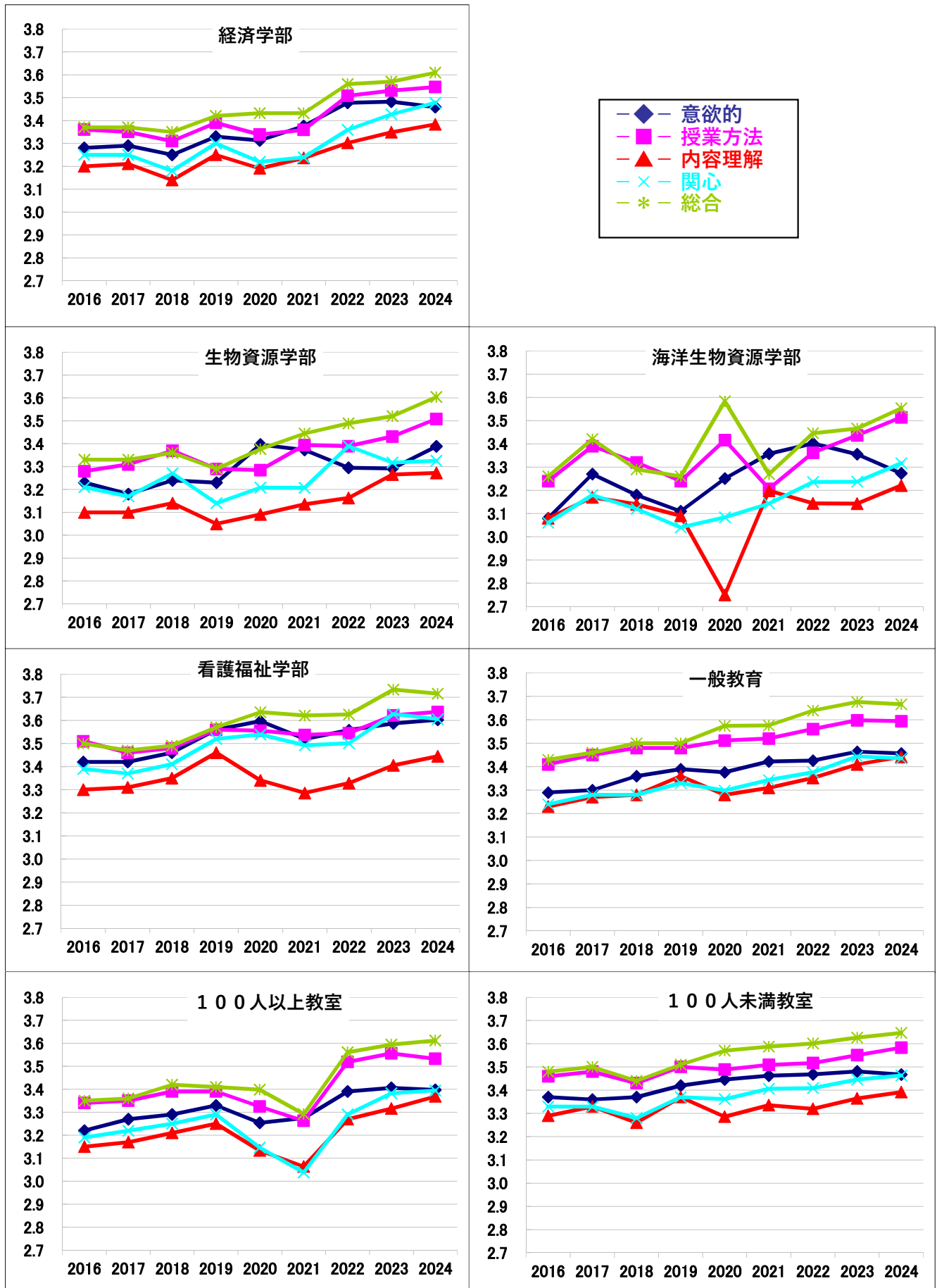


図2 重要項目の経年特性（後期）



1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

1.2.3 FD研修

全体研修は令和6年度は実施せず。各部局で行った研修は、2章「各部局のFD活動」にて報告する。

1.2.4 実施要項

福井県立大学学生による授業評価実施要項

1 目的

学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。

2 対象教員

専任教員および非常勤講師

3 対象学生

学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生

4 対象授業

(1) から (3) を除く授業科目

ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。

(1) オムニバス授業

(2) 実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科

(3) 実施期間終了後の集中講義

5 期間

前期科目：前期 期末試験期間前の2週間

後期科目、通年科目：後期 期末試験期間前の2週間

集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。

6 方法

(1) ウェブを用いたフォームへの入力によって実施する。

- (2) 事前の申請により、その他の方法でも実施することができる。
- (3) 特定部局で別途授業評価に関するアンケートを実施している場合、FD 部会での協議の上、それをもって FD 部会が実施する授業評価アンケートに代替することができる。ただし、この場合、下の 7 に示す項目と同等の設問を含んでいなければならない。

7 項 目

評価は、下記項目について実施する。

- (1) から (5) については、4 段階評価とし、(6) については、自由記述とする。
- ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。

- (1) 受講の意欲
- (2) 授業方法
- (3) 内容の理解
- (4) 関心
- (5) 総合評価
- (6) 感想等

8 評価結果の取扱い

- (1) 評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、教員に送付する。
- (2) 教員はアンケート結果に対してコメントを付ける。ただし、コメントが学生を攻撃するような内容になっていないように配慮すること。
- (3) 評価結果、実施データおよびコメントは部局長の閲覧に供する。部局長は必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。
- (4) 評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。
- (5) 6 (3) により、特定部局で別途実施したアンケート結果の取扱いに関しては、当該部局が提供する授業に限り、当該部局で協議の上、その取扱いを決定することができる。

9 評価結果の公開

- (1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内 LAN 内のウェブページにて公開する。
- ただし、7 (6) 感想等の記載内容については、公開しない。
- 評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。
- (2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内 LAN 内のウェブページにて公開する。
 - (3) ただし、6 (3) 特定部局で別途実施したアンケート結果の公開に関しては、当該部局が提供する授業に限り、当該部局で協議の上、公開の扱いを決めることができる。

【 附 則 】

平成 2 6 年 4 月 1 日 施行

平成 2 7 年 5 月 2 6 日 改正（期間）

平成 2 9 年 6 月 7 日 改正（評価結果の取扱い）

令和 6 年 3 月 2 7 日 改正（実施方法及び他のアンケートの利用）

2.1 経済学部（新宮晋、廣瀬弘毅）

コロナ禍対応の中で整備された遠隔授業が、コロナ禍明けの中でも一定数定着した面がある。災禍への対応として進められたこの授業形態には、避けがたい対応としての経験を通じて、通常の対面授業にはないメリットがあることが多くの教員によって知られた。他方で、やり方によっては効果の面で疑問の残ることも確認された。特に、本来の対面授業の、教員と学生の、あるいは学生どうしのコミュニケーション可能な状況の確保など、文字通り「直接」性を持つ授業の重要性を改めて確認しておくことは、大切であるように思われる。

文部科学省の周知事項のなかで、2022年以降遠隔授業が卒業要件単位数のうち60単位を上限に、それを超えないとすることが示された。本学部もすでに原則対面授業にほぼ移行しているのでこの制約を超えることはなさそうであるが、改めて対面授業の重要性が確認されているともいえる。ただ、遠隔授業ならではのメリットを活かせる科目もあるだろうし、この60単位という制約の中で今後授業改善の取り組みとして遠隔授業をどう位置づけるか、どのような授業が遠隔に適しているのかなどは、本学部内での課題の一つと考えられる。

2.1.1 授業評価

今年度の前期・後期それぞれの本学部及び大学院の授業評価結果は、次表の通りである（但し大学院前期は、評価対象科目はなかった）。

学部	集計数	Q1 意欲 的受講	Q2 授業 方法	Q3 内容 理解	Q4 関心	Q5 総合 評価	Q9 遠隔 システム 活用	Q10 遠隔 授業の効 果
前期	1320	3.40	3.51	3.32	3.36	3.56	3.44	3.34
		0.02	0.08	0.10	0.08	0.11	0.02	0.01
後期	1036	3.46	3.55	3.38	3.48	3.61	3.45	3.38
		-0.02	0.02	0.03	0.05	0.04	-0.07	-0.09

大学院	集計数	Q1 意欲 的受講	Q2 授業 方法	Q3 内容 理解	Q4 関心	Q5 総合 評価	Q9 遠隔 システム 活用	Q10 遠隔 授業の効 果
前期	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—	—	—
後期	21	3.33	3.48	3.38	3.57	3.62	3.00	3.24
		-0.17	0.48	0.21	0.40	0.62	0.20	-0.16

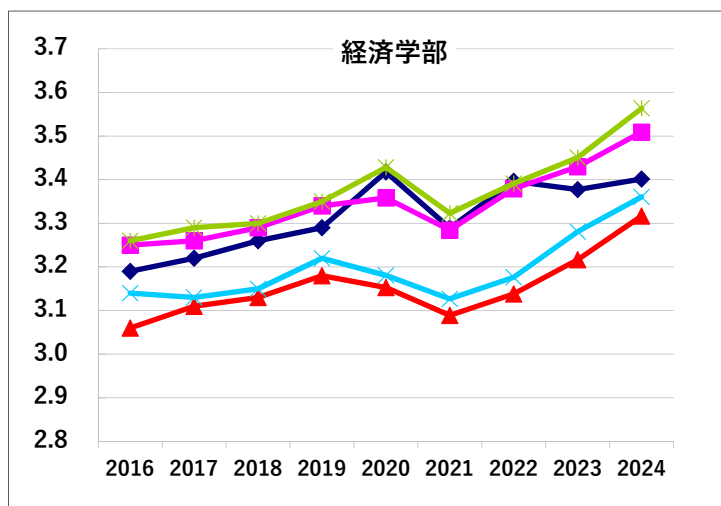
※上二表とも、下段の数値は昨年度との差（今年度－昨年度）である。

概ね高い水準にあると言えよう。前年度との比較で見ても、同水準ないし改善傾向にあることが見てとれる。「意欲」という受講者側の主体的評価については低く出ている。受講生の自己評価の低さを反映しているとも考えられるが、同時に積極的な取り組みを促す工夫が求められているともいえる。

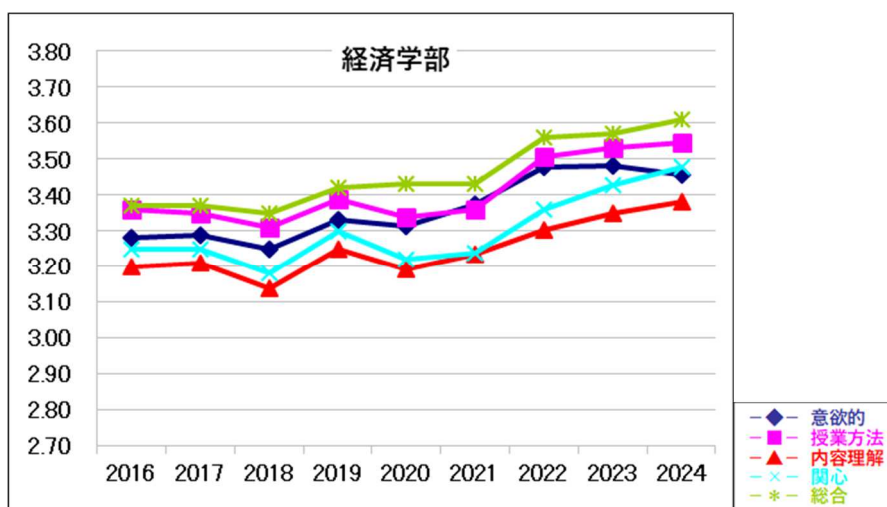
冒頭で触れた遠隔授業については、特に学部において、決して低い水準というわけではないが昨年よりもわずかながら下がっている。そもそも遠隔授業の数はかなり減っており、サンプル数が前年度と比べても小さくなっているので評価が難しいところである。冒頭で述べたとおり、遠隔授業の適切な利用は、これまでの経験を踏まえて議論を継続すべき授業改善上の論点の一つである。

学部について授業評価の経年変化を見たのが、次の表である。

前期



後期



この間の変化を見ても、授業に対する評価は、コロナ禍直後を除き、前期・後期とも上

昇傾向にあることが分かる。他方で各年度の「関心」や「内容理解」が相対的に低いことも見てとれる。受講者の主観的評価とはいえ、「関心」を引きつけいっそうの「内容理解」に繋げることがさらに求められている。

なお、これは前年度にも指摘されていることであるが、授業評価アンケートの回答数が十分とはいえない。回答時間を授業時間中に確保するなど、回答数を上げるための工夫が改めて求められる。

2.1.2 授業公開とゲスト招請授業

経済学部では、いくつかの授業で専門家や実務者をゲストとして招き、授業の意図をより効果的に受講者に理解させる試みを続けてきている。これらは、その授業の性質上、例えば現場感覚に触れるなどのために外部講師に依存せざるをえないものもあれば、担当者の知見を超えた情報や知識をゲストに補ってもらうなど、様々な理由にもとづいている。

こうしたことを積極的に行っている授業のいくつかは、受講生以外にも公開しているものもあり、受講生以外の学生に対しては滅多にない機会を提供するとともに、教員に対してもゲストスピーカーを授業にどのように活かすかについて参考にする機会を提供している。

以下に、今年度の招聘実績を示す（順不同。これらは実施されたゲスト招請講義の全てを網羅している訳ではなく、いくつか漏れている可能性もある。〔 〕内は実施授業科目名である）。

〔農業経済学〕堀田教授担当

福井県農業試験場 農業経営・流通支援課主査 道坂怜生氏

福井県 嶺南振興局 農業経営支援部主事 井上真依氏

東京都中央卸売市場大田市場東京青果 経営戦略室 中村岩生氏

東京都中央卸売市場大田市場東京青果 総務部 鈴木卓磨氏

〔農業生産・流通政策論〕堀田教授担当

城南地方卸売市場 城南青果代表取締役 福島暢人氏

東京都中央卸売市場大田市場東京青果 総務部能力開発課 橋本翔平氏

〔経営組織論Ⅱ〕北野准教授担当

福井コンピュータ元社長、福井県立大学特任講師 林治克氏

システムコンサルタント、福井県立大学地域連携本部協力研究員 河中啓之氏

〔マーケティング論〕北島教授担当

Genky DrugStores 株式会社 代表取締役社長 藤永賢一氏

講演「多店舗展開によるゲンキーの成長戦略」

エッグフォワード（株）スタートアップ投資総括執行役員 三村泰弘氏

講演「ベンチャーキャピタルの視点」

福井県経営改革課参事 田中穰氏 講演「福井県のスタートアップ支援について」

[広告論] 北島教授担当

福井産業支援センター 岡田留理氏

[特別企画講座 E（サステイナブルな地域経済活性化と国内外観光産業論）] 藤野教授担当

一般社団法人地域サステナビリティ総合研究所顧問 阪田徹氏

オールコネクト社長 岩井宏太氏

[生産管理論Ⅰ] 木野教授担当

シンフォニアテクノロジー株式会社 代表取締役会長・本学客員教授 武藤昌三氏

同社 豊橋製作所総務部安全衛生担当 安藤大喜氏（本学経営学科卒業生）

[生産管理論Ⅱ] 木野教授担当

株式会社松浦機械製作所 経営企画室管理兼人事企画室 清水継太氏

同社 総合物流本部生産管理 木村美月氏（本学経営学科卒業生）

[日本経済史] 池本准教授担当

福井県立大学特任講師 小谷正典氏

福井県立大学特任講師 山本祥平氏

[ロシア経済論] ベロフ教授担当

日本経済研究センター首席研究員 伊集院敦氏

講演「デリスキング下の北東アジア経済」

※公開講義として実施。本学 OB、大学院生、経済学部教員の教員も参加。

[地域マネジメント論] 杉山友城教授担当

社会起業家 三矢楓氏

県庁／人財発掘ディレクター 倉田翔平氏

[演習Ⅰ（地域創生・地域マネジメント）] 杉山友城教授担当

地域経済研究所客員研究員 山内孝紀氏

[中国経済論] 加藤准教授担当

あわら市創造戦略部市民協働課主事 長谷川拓也氏

「地方自治体の国際交流」。あわら市と中国浙江省紹興市との交流、多文化共生、インバウンドの取り組み

[中国の企業と経済] 加藤准教授担当

福井新聞社みんなの新聞推進室長 菊野昭彦氏 「情報の収集と分析」

福井商工会議所地域振興部係長（県大 OB） 藤原卓也氏

県内企業の国際化の状況、就職後の自身のキャリア（北京駐在）等

日華化学株式会社常勤監査役（県大院 OB） 宮本和浩氏

日華化学の海外展開の状況、海外駐在での経験

熊田総合法律事務所弁護士（元検事、在中国日本大使館邦人保護担当） 國井大祐氏

日本の経済安全保障政策、中国の「反スパイ法」
 福井県警察本部警備部課長補佐 木津浩史氏
 日本の経済安保対策（国内）、技術流出の経路・対策
 北京理工大学外国語学院日本語教師（県大OB） 吉田陽介氏
 「中国の最新トレンド」。中国の消費の変化、最新の中国事情
 ひかり法律事務所弁護士・元経済産業省模倣対策専門官・福井県議会議員 山浦光一郎氏
 自身と中国との関わり、現在の国際紛争、中国の行動原理をゲーム理論、国際法などから分析

[応用経済学] 中井准教授担当
 富山大学 楊潔氏

[演習Ⅰ・Ⅱ] 中井准教授担当（※桑原ゼミと合同。桑原先生のコーディネート）
 日本エネルギー研究所 村上朋子氏

[国際経済学A] 杉山泰之教授担当
 日本貿易振興機構福貿易情報センター所長・本学特任講師 齋藤寛氏
 日本貿易振興機構福貿易情報センター 清島優花氏

[演習Ⅰ・Ⅱ] 清水教授・杉山泰之教授・新宮教授担当
 国際廃炉研究開発機構理事長・日本原子力発電(株) フェロー（廃止措置担当）・原子力安全研究協会 理事(非常勤) 山内豊明氏

[会計学Ⅱ] 徳前教授担当
 北陸財務局福井財務事務所 所長 青木雅信氏 「日本の財政を考える」
 金沢国税局福井税務署所長 神田幸範氏 「給与と税・税務署の仕事」

[経営財務論] 境准教授担当
 福井県信用保証協会管理部管理統括課 小泉優氏
 「中小企業の特徴と信用保証協会の役割について」
 福井県信用保証協会総務部総務課 増永勇太郎氏
 「信用保証協会の業務とやりがいについて」

以上については主として実施実績のみを示しており、内容については把握できたもののみにとどまっている。いずれにしても、こうした取り組みはかなり以前から積極的に行われており、それぞれの授業科目で経験を通じた多くの知見が積み重ねられているものと考えられる。また、公開実績は一部にとどまるが、担当教員からは、参加者の理解深化に寄与したことが報告されている。

2.1.3 授業改善についての課題と展望

今回まとめたゲストを招請しての授業は、多様でかつ様々な工夫や意図にもとづいていることが垣間見られる。試行錯誤しながらもそれぞれの科目の特性からそれらに応じた対

応がなされた成果であり、効果的かつ必然性をもって実施されているものと考えられる。

今後は、これまで様々な形で招請講義を実施してきたこれらの経験を、共有したり相互に検証したりして、それらが授業改善にどのように資するか、学部として考える機会を持つことを課題の一つとしてよいかもしれない。それらを通じて、ある授業ではこのような取り組みがより効果的になるであろうし、別の授業では重要でも必要でもない場合もあろうことが考えられる。

これらのことは遠隔授業についても言える。卒業要件の制約ある中で遠隔授業を行うについては、それなりの必然性が求められるであろう。これらについても教員スタッフ内でこれまでの経験を共有し、授業改善に役立てることができるものと思われる。

2.2 生物資源学部（植松宏平）

2.2.1 授業評価

学部の授業評価結果は、前後期ともほとんどの項目で昨年とほぼ同様の結果であったが、「授業方法」については、前後期とも昨年度より高い値となった。

近年 10 年間に於いて、生物資源学部の授業評価は、どの評価項目においても、一般教育、経済学部、看護福祉学部の授業評価より低い傾向にある。これにより、生物資源学部のスコアは、毎年、全学部平均より低い。今年度も、生物資源学部の授業評価は、ほとんどの項目において全体平均より幾分低い結果となった。一般に理系科目のスコアは文系科目に比べて低くなる傾向があり、講義科目の内容との関連性が推測される。

令和 6 年度 学生による授業評価全体集計結果（学部生）

		集計数	Q1 意欲	Q2 授業 方法	Q3 内容 理解	Q4 関心	Q5 総合 評価
前期	全体	5333 (31)	3.43 (-0.01)	3.51 (0.02)	3.32 (0.03)	3.37 (0.02)	3.57 (0.03)
	生物 資源	187 (-142)	3.36 (0.03)	3.47 (0.11)	3.19 (0.00)	3.26 (-0.08)	3.50 (-0.02)
後期	全体	3534 (140)	3.45 (-0.01)	3.57 (0.02)	3.39 (0.03)	3.44 (0.02)	3.64 (0.02)
	生物 資源	283 (91)	3.39 (0.10)	3.51 (0.08)	3.27 (0.01)	3.33 (0.01)	3.60 (0.08)

() 内は、昨年度との差（今年度 - 昨年度）。

大学院の授業評価結果は、前期では昨年度と比較し「意欲」「授業方法」「内容理解」「関心」の項目で評価値が高くなった。今年度と昨年度で講義内容や実施方法に大きな違いはなく、スコアが変化した要因は不明である。後期については集計数が少ないため分析することが難しいが、昨年と同様、高い評価値が得られている。

大学院全体の授業評価値と比較すると、大学院では学部の結果とは異なり、同程度もしくはそれ以上の評価値が得られている。大学院での高い評価値が今年度だけの結果なのか、あるいは継続的に示されるのか、今後の評価値の変動を注視する必要がある。

令和6年度 学生による授業評価全体集計結果（大学院生）

		集計数	Q1 意欲	Q2 授業 方法	Q3 内容 理解	Q4 関心	Q5 総合 評価
前期	全体	25 (-25)	3.56 (0.12)	3.64 (0.10)	3.28 (0.02)	3.44 (0.06)	3.56 (0.02)
	生物 資源	19 (-11)	3.58 (0.35)	3.68 (0.21)	3.32 (0.15)	3.42 (0.22)	3.63 (0.04)
後期	全体	26 (19)	3.42 (-0.15)	3.50 (0.36)	3.42 (0.14)	3.58 (0.29)	3.65 (0.51)
	生物 資源	5 (4)	3.80 (-0.20)	3.60 (-0.40)	3.60 (-0.40)	3.60 (-0.40)	3.80 (-0.20)

() 内は、昨年度との差（今年度 - 昨年度）。

2.2.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

生物資源学部では、各教員が必要に応じて学部内の教員の講義を聴講し、講義内容を直接確認できるよう、全講義の「随時公開性」を採用している。また毎年、1-2 科目を授業公開の対象科目として選定し、所属教員による授業参観を実施している。公開授業の選定については、以下の項目を選定基準としている。1) 授業評価において学生から高い評価を受けた授業、2) 効果的でユニークな教育手法を取りいれている授業、3) 生物資源学科と創造農学科の学生を対象としたハイブリッド形式の授業、4) 公開授業をまだ担当していない教員による授業。

また公開授業の後、担当教員と参加教員によるミーティングを実施している。ここでは、対象講義に関するフィードバックを行うと共に、参加者の講義における工夫点や効果的な教授法に関する意見交換を行い、学部全体の教育の質の向上に努めている。

(2) 実績

今年度は、日井教授の「有機化学」および濱野教授の「生物有機化学」を公開講義に選定し、授業参観と意見交換会を実施した。

公開科目： 「有機化学」

実施日時： 2024 年 6 月 28 日 2 限（10：40-12：10）

場所： 共通講義室棟 L204

意見交換会： 同日、12：15-13：00

場所： 生物資源学部棟 1F 会議室
参加者： 10 名（教授 4 名、准教授 5 名、助教 1 名）

公開科目： 「生物有機化学」
実施日時： 2024 年 11 月 5 日 1 限（9：00-10：30）
場所： 共通講義室棟 L204

意見交換会： 同日、12：15-13：00
場所： 生物資源学部棟 1F 会議室
参加者： 7 名（教授 3 名、准教授 3 名、助教 1 名）

今年度は、前年度の授業評価において学生から高い評価を受けた講義を公開授業の対象とした。今回の公開授業では、Mentimeter と呼ばれるオンラインツールが活用されていた。Mentimeter は、スマートフォンや PC を使用し、参加者が無記名で投票や意見の投稿を行えるツールである。通常、学生は講義中に発言を促されても、自信がないためか、自分の考えや意見を述べられないことがおおい。このツールが学生の関心や理解度、疑問点などをリアルタイムで把握するのに有用であることが示されていた。

また、今回の講義でも学生の関心や集中力を持続させるための工夫が随所に見られた。具体的には、1）学生が関心を持ちやすい題材を適宜取り入れる、2）学生の関心・理解を深めるために動画を活用する、3）重要事項や特筆すべき点を強調し、単調な進行にならないよう工夫する、などである。これらの工夫により講義は効果的に進められ、公開授業が学生にとって評価の高い講義の特徴を学ぶ良い機会になったと思われる。

公開授業後にはミーティングを行い、講義の長所や改善点、感想について意見交換を実施した。また、参加者それぞれが自身の講義で取り入れている効果的な方法や、講義運営における課題・問題点についても共有した。

2.2.3 授業改善活動についての課題と展望

生物資源学部では、各教員が必要に応じて学部内の他の教員の講義を聴講し、講義内容を確認できるよう、全講義の「随時公開性」を採用している。また、毎年 2 科目程度を授業公開の対象として選定し、所属教員による授業参観を実施している。公開授業後には講義の工夫や課題、解決策について意見交換を行っている。生物資源学部の 1/3～1/4 の教員が出席しており、今後もこうした活動を継続し、学部全体の講義の質の向上に努めていきたい。

今年度の生物資源学部における授業評価アンケートの実施率は、前期では 78%、後期では 80%であった。ここ数年、前期・後期ともに 90%程度の高い実施率を維持していたが、今年

度は低下した。実施率が低くなった理由は明確ではないが、授業評価アンケート自体は実施されていたものの、学生からの回答が得られず、結果的に実施率が下がった可能性が考えられる。実際に今年度も生物資源学部での学生からの回答状況は、全体平均と比較して低かった。今後も授業評価アンケートを講義時間中に実施する、繰り返し学生に回答を促すなど、回答状況の改善に努めたい。

また生物資源学部では、新たな取り組みとして、授業評価アンケートに寄せられた学生からのコメントを可能な範囲で共有し、各教員の講義スキル向上に役立てることを検討している。

2.3 海洋生物資源学部（瀧澤文雄）

2.3.1 授業評価アンケート

海洋生物資源学部における 2024 年度の授業評価アンケートの実施科目数は前期が 30、後期が 26 であった。先端増養殖科学科の学生が 1～3 年生まで揃ったため、同学科の専門教育科目が増えたことにより、例年より科目数が増加した。受講者が少人数（概ね 5 人以下）の科目やオムニバス形式の科目、実験・実習・演習科目を除き、実施率はそれぞれ 96.8%と 96.3%とほぼ全ての科目で授業評価アンケートが実施された。また、多くの教員は、学生からの自由記述に対して具体的な改善方法を提示するなど丁寧なコメントを公表していた。

アンケート結果の経年変動を見ると（ファカルティ・ディベロップメント報告書の 1. 2. 1 授業評価「重要項目の経年特性」の参照）、前期では例年と比べて評価が減少してしまったものの、後期における本学部の講義に対する評価は概ね緩やかな上昇傾向ないし安定傾向にあり、アンケート開始以来で初めて全評価項目の平均で 3.3 を超えた 2022 年度に引き続き、2024 年度も後期では 3.3 を超える評価を得た。一方で他学部との比較では、前期・後期ともにやや下回っている項目が多く（図 1）、本学部の講義にもまだ改善の余地が残されていることが示唆される。

評価値の標準偏差は、例えば総合評価の項目で前期 0.93、後期 0.57 と、前期は例年のアンケートや全学平均よりも大きい標準偏差となり、後期について全学平均よりとほぼ同等であった。しかし、講義間で回答数に多少があるため、少ない回答者の講義についてはバイアスがかかっている（熱心な学生が主に回答するため評価が一定になる）こともあるため、回答数の向上を目指して、講義時間内に回答時間を設けることや、余裕をもってアンケート期間を設けるなどの対応を進めることが重要となる。また、アンケート結果を講義科目間で（あるいは学部間や年度間で）比較する際には、教員の変更や科目ごとの難易度の違いもあるため、細心の注意が必要であることは言うまでもない。特に理系の基礎科目においては、実際に自らが研究の現場で使用することでその重要性・有用性を実感しない限り、学習する意義をなかなか見出しづらい性質の科目も数多く存在する。その意味で、アンケート結果だけが講義の評価基準ではないことには十分配慮しつつ、引き続きより効果的かつ魅力的な講義を展開できるよう学部全教員で協力して取り組んでいきたい。

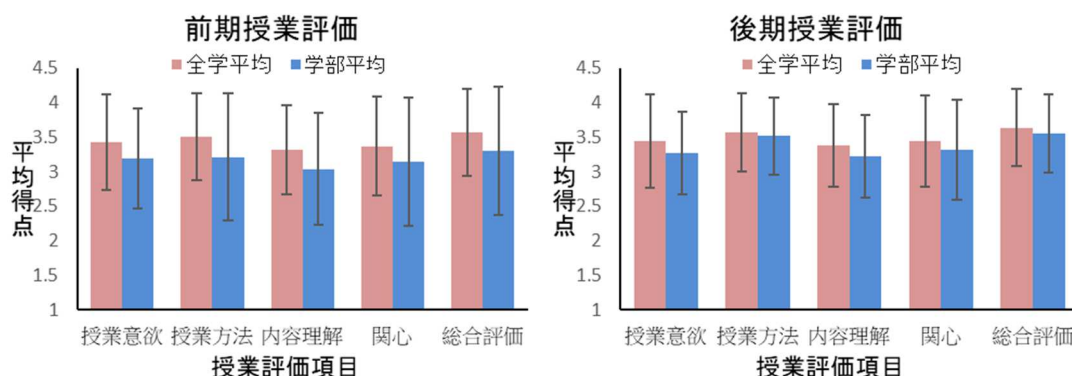


図 1: 2024 年度前期および後期の海洋生物資源学部における授業評価アンケートの結果。各項目に付されたバーは標準偏差を表す。

2.3.2 授業公開

(1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参観者と意見交換することを通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会を

提供することを目的とする。授業公開は大学教育における画一的な模範授業を目指すためのものではなく、教育の自由が保障される中で、個々の授業内容に合わせたより特色のある効果的な授業を継続的に育むためのものである。そのため、授業内容について非建設的な批判を行うのではなく、講義に対する互いのスタンスを尊重しながら、特に授業方法について教員同士が学び合うことを趣旨としている。

(2) 実績

2024 年度には後期に一回の授業公開を実施した。参加教員数が本学部専任教員 31 名中 10 名と例年よりは多かったが、キャンパスが違う養殖科学科の教員の参加が少なく、次年度以降はより積極的に参加を呼びかけたり、1 限目の講義を対象にしたりすることにより、授業改善の有効な場となるよう努める必要がある。

本年度の授業公開は、松川 雅仁 教授が海洋生物資源学科の3年次および先端増養殖科学科の2年次対象に開講している「食品安全管理論」を対象として1月に開催された。本科目は食品の安全や管理について学ぶ科目であり、水産物の食品を取り扱う本学の学生にとって人気の科目でもある。

松川教授の「食品安全管理論」がどのようにして講義内容を学生に伝え、また、学生の知的欲求を満たし、主体的な学習を促すためにどのような工夫がなされているのかを知り、自らの講義へとフィードバックする機会と位置付けて授業公開を実施した。

公開科目名：食品安全管理論

(海洋生物資源学科 3 年次開講・先端増養殖科学科 2 年次開講、専門応用科目 選択)

担当教員：松川 雅仁 准教授

公開日時：2025 年 1 月 10 日 (金)

・授業見学：10:40～12:10

参観教員は感想や質問などを記録

・検討会：12:10～13:40

参観教員の感想をもとに意見交換を行う

会場：小浜キャンパス講義棟 大講義室 2

参加者：10 名 (佐藤晋、山田、吉川、小路、山本、高尾、下畑、今道、末武、吉浦、瀧澤)

講義内容に対する意見の概要は以下の通りであった。

- ・食品の成分表示と消費期限について
- ・話題・分量が絞られていて、理解しやすい。
- ・話の強弱の差が大きかったのでハイライト点がわかりやすかった
- ・身近だけどあまり知らない話が盛り込まれることで記憶にも残りやすい

2.3.3 授業改善についての課題と展望

海洋生物資源学部における今後のFD活動方針

2024 年度は先端増養殖科学科の第一期生と第二期生がそれぞれ二年次生と三年次生となり、海洋生物資源学科・先端増養殖科学科の二学科体制による専門講義や実験・実習が本格化した。また、小浜キャンパスとかつみキャンパスで行われる講義があり、キャンパス間の移動やテレビ講義の活用が始まる。この機会に、各教員の講義をより魅力的かつ効果的なものとするために、年二回程度(前期・後期に一回ずつ)、若手とベテランの教員の授業公開を実施し、新任教員の方にも積極的に参加を呼びかけ、他大学での効果的なアプローチを紹介してもらうなど、在任教員との間で自由に意見交換できる機会を提供することが考えら

れる。こうした教員間の相互作用を通じて、各教員が自らの専門性や背景を活かした特色ある講義について考える契機になればと期待している。キャンパスが小浜と堅海の2つになり、キャンパス間の交流を増やす機会にもつながるであろう。

また、授業公開のうち少なくとも一回は前年度までの授業評価アンケートで高い評価を受けた授業を対象とすることで、授業評価アンケートのフィードバックを通じた教育の質の向上を目指す。

2.4 看護福祉学部（普照早苗）

今年度も昨年度に引き続き、授業評価アンケートについては前期・後期ともに Google form によるオンライン質問紙調査が実施された。学部全体としての結果をここに報告する。これらのデータを基に授業評価（2.4.1）ならびに授業改善の取り組みと今後の課題、展望を報告する。また FD 研修（2.4.2）及び授業公開（2.4.3）についてもあわせて報告する。

2.4.1 授業評価

2024 年度は、コロナ禍も明け対面授業も通常化した、引き続き、柔軟にハイブリッド・ハイフレックス授業を実施する授業形態が定着した。また、昨年度に引き続き、BYOD 化が推進され、授業資料のペーパーレス化も浸透し、教員・学生共に、PC、タブレット、スマートフォンなどを十分に利活用することが学部全体で成され、講義・演習・実習すべてにおいて、これらの授業形態が定着した年となった。下図は令和 6 年度の看護福祉学部と大学全体の結果を比較した授業評価である。

【R6 年度前期授業評価】

前期は、回答数が 714（対象数 2,061）であり、全て学部生であった（大学院生は少人数の開講の為、常時 FD 授業評価アンケートの対象外となっている）。参加教員数 28 人（87.5%）、参加科目は 43 科目（86.0%）であった。

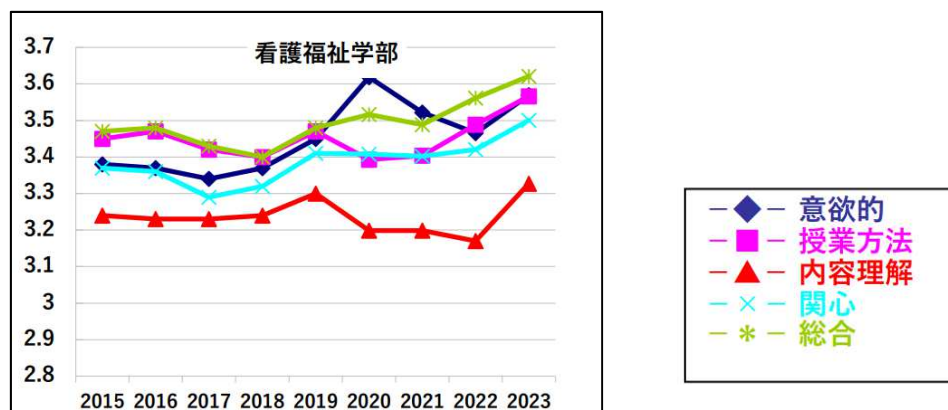
令和 6 年度 学部生による授業評価全体集計結果（前期）

	集計	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q9	Q10
		意欲的受講	授業方法	内容理解	関心	総合評価	遠隔システム活用	遠隔授業の効果
全体	5,333	3.43	3.51	3.32	3.37	3.57	3.43	3.33
看福	714	3.54	3.62	3.35	3.50	3.67	3.65	3.58

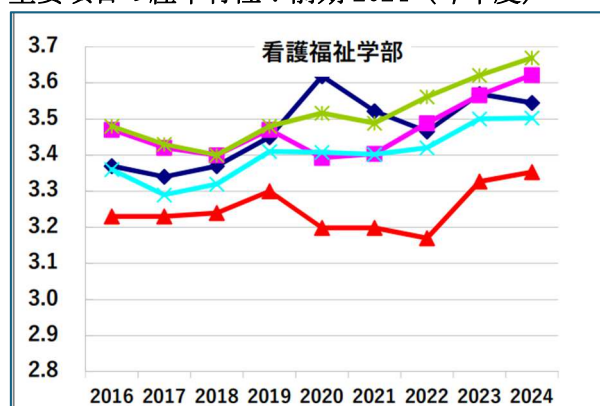
※1. 本学部を「看福」とする。 ※2. 全体表より全体値及び本学部値を抜粋。

科目特性はあるものの、いずれの数値も本学部が全体平均を上回っており、おおよそ例年通りの結果であった。Q1～Q5 に関しては、将来の国家試験取得や専門職としての就職を目指す学生がほぼ全体を占めることから、学生は常時危機感をもち、授業に取り組んでいると考える。また、Q9～Q10 に関しては、コロナ禍からの ZOOM や GC 等を利活用し始めて 5 年目を迎え、学生にとっても教員にとっても熟達してきており、極端に遠隔システムを利用することに対して負担や不得手感を感じる者が減少、授業の通常ツールとして浸透してきていると考える。次に、前期科目の重要項目の経年特性を示す。

重要項目の経年特性：前期 2023（昨年度）



重要項目の経年特性：前期 2024（今年度）



2024 年度は、コロナ禍以前の状態に戻り、ほぼ通常の対面授業に戻ったことで、学生と教員のかかわりがコロナ禍より密になったこと、授業終了後の時間帯に直接やり取りができることで重要項目の数値が昨年度よりあがったことが予測された。次年度は、コロナ禍で身につけた ICT・オンライン教材のよさも十分に活用し、多角的な授業形態で、より充実した教授方法が継続できるように教員が授業の工夫をしていくことが望まれる。

【R6 年度後期授業評価】

後期は、回答数が 380（対象数 1,681）であり、全て学部生であった（大学院生は少人数の開講の為、常時 FD 授業評価アンケートの対象外となっている）。参加教員数 20 人（83.3%）、参加科目は 28 科目（71.8%）であった。

令和 6 年度 学部生による授業評価全体集計結果（後期）

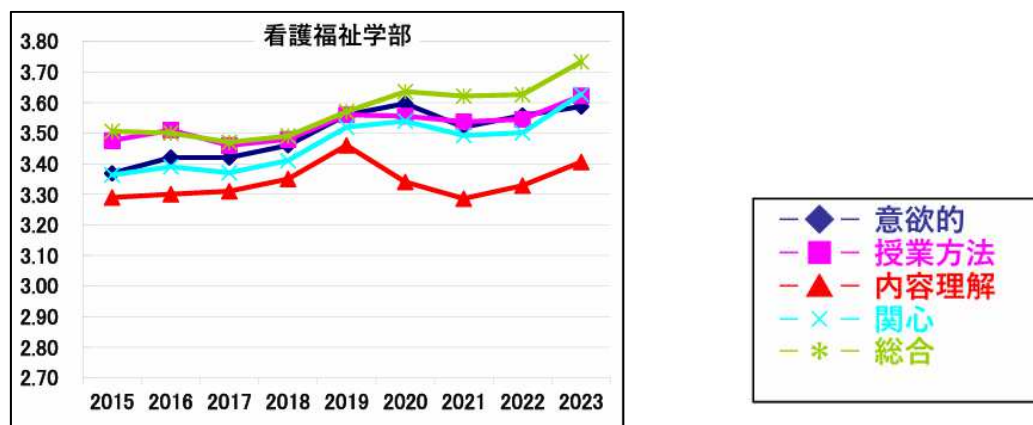
	集計	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q9	Q10
		意欲的受講	授業方法	内容理解	関心	総合評価	遠隔システム活用	遠隔授業の効果
全体	3,534	3.45	3.57	3.39	3.44	3.64	3.48	3.41
看福	380	3.60	3.64	3.44	3.61	3.72	3.68	3.57

※1. 本学部を「看福」とする。 ※2. 全体表より全体値及び本学部値を抜粋。

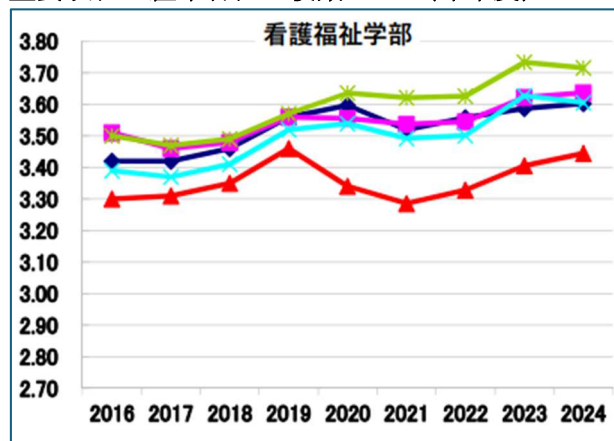
後期も前期同様、いずれの数値も本学部が全体平均を上回っており、こちらも例年通りの結果となった。看護福祉学部のみ昨年度比も、現状維持から微増という結果であった。

次に、後期科目の重要項目の経年特性を示す。

重要項目の経年特性：後期 2023（昨年度）



重要項目の経年特性：後期 2024（今年度）



後期も前期と同様の傾向が見られた。コロナ禍の2020年から2022年の2～3年間と比べ、2023年度のポイントは上昇していた。2024年度後期は、現状維持からほぼ微増のポイントであり、昨年に引き続き、対面を中心に、オンライン・オンデマンドのハイブリッドの授業形式により、学生の授業後の反応も見ながら授業改善に取り組んでいくことが重要である。オンライン授業が減少した分、必要時開催されたオンライン授業で、ZOOMやGoogleワークスペースの使用方法に戸惑う学生もいた。その都度、オンライン教材も使用できる能力を学生に教授していく必要がある。

例年、看護福祉学部の授業は、専門職教育科目のため、内容が難しく膨大な知識の蓄積が必要となる為、学生の理解力がどのレベルまで到達しているかを都度確認しながら授業展開していくことが望まれる。

なお、参考までに付記するが、2024年度看護学科卒業生の看護師・保健師国家試験の合

格率は、100%であった。

2.4.2 FD 研修

今年度も、昨年度に学部長の発案によって大学院の授業科目の内、外部講師の許可が得られたものに関して特別講義とし授業の公開を行い、大学院生ほか学部教員の積極的な参加がなされた。いずれも対面・オンライン（ZOOM）の、どちらも対応する形式で実施され、参加しやすい形態であった。今年度も、情報が公開された後、希望する教員が積極的に参加し自己研鑽できるような機会を多く設けるようにした。今年度、公開講義の実績は、以下の通りであった。

【大学院特別講義開催一覧】

1. 演題：臨床倫理について

講師：高野誠一郎先生（福井赤十字病院副院長・神経内科部長、日本臨床倫理学会上級臨床倫理認定士）、医師（神経内科専門医・内科専門医）、医学博士（京都大学）

日時：5月23日（木）6限（18：00-19：30）

2. 演題：メンタルヘルスの課題からの「リカバリー」～リカバリーカリッジ OKAYAMA の実践～

講師：リカバリーカリッジ OKAYAMA 木本達男氏（精神保健福祉士）鈴木健司氏（ピアスタッフ）

日時：5月30日（木）6限（18：00-19：30）

3. 演題：がん緩和医療を漢方から科学する

講師：上園保仁先生（東京慈恵会医科大学 疼痛制御研究講座 特任教授）

日時：6月17日（月）6限（18:00～19:30）

4. 演題：誰のための医療安全か ～心理的安全性のある職場～

講師：藤田信也先生（長岡赤十字病院 院長）

日時：6月21（金）5限（16:20～17:50）

5. 演題：遺伝倫理について

講師：渡邊淳先生（金沢大学遺伝診療部 特任教授）

日時：7月29日（月）6限（18：00-19：30）

2.4.3 授業公開

今年度は、授業公開科目として、前期は、「社会福祉学概論Ⅰ（担当：畠中耕先生）」、「地域・在宅看護学演習～新町ハウスでのフットケア～（担当：普照早苗、梅津千香子先生）」、後期は「ソーシャルワーク演習Ⅱ（担当：坂口昌宏先生）」、「成人急性看護学実習・SIM 演習（熊谷あゆ美先生、矢島直樹先生）」が選定され、これらの科目に関して授業参加者を学部内教員の中から募集した。

参加希望者は、「社会福祉学概論Ⅰ」3名、「地域・在宅看護学演習」2名、「ソーシャルワ

ーク演習Ⅱ」3名であった。「成人急性看護学実習・SIM演習」は準備をしていたが、開催日、残念ながら機器の不調があり不開催となったため、実績が残せなかった。次年度以降に、再実施を予定したい。全体的に、学科の垣根を越えて専門外の分野の授業に参加した教員からは、新鮮な発見、気づきが得られており、今後の自身の授業に活かせるヒントがさまざま感じられていた。FD活動として、有意義な内容となっており、次年度以降も積極的に開催を進めていきたいと考える。

以下に、開催された科目に関して、参加教員による意見・感想についてまとめた。

1) 前期：「社会福祉学概論Ⅰ（担当：畠中耕先生）」参加教員のアンケート内容

- ほとんどの学生さんが必死にメモを取っている姿が印象的で、学生さんの関心を引き付ける工夫があれば知りたいなと思いました。また、実際の出来事を知り、社会福祉とは何かと私自身考えさせられる時間となりました。
- 授業内容が、施設職員の虐待、生活保護（123号通達）、孤独死等、シビアな内容であり、聴講していても現代社会の闇に関して身につまされる思いでした。社会福祉学科の学生（1年生）も真剣に授業を聴いており、ノートを取る姿も非常に熱心であったのが印象的でした。途中のビデオでは生活苦に苦しむ人々の姿に涙している学生もおり、このような現実を知り、実際に自分たちが福祉の専門職として働く際には、この授業を思い起こし、本来あるべき専門職としての責務を果たそうと実践に取り組むのであらうと期待が膨らみました。畠中先生の授業のペースも、学生の記録に合わせてゆっくりと分かりやすく聞きやすかったです。実際のニュースも紹介され、現代日本においてこのような深刻な問題がまだまだあることに対して現実的で実感が沸きました。特に、地域看護では、今回のようなことが日常として起こっているの、自分自身の過去の体験からも、今後より一層解決に向けた対策を考え続けなくてはいけないと思いを新たにしました。授業を聴講させて頂き大変勉強になりました。
- 配布資料がない分、学生が大切なことを自分で考えて記載していたため、まじめに取り組んでいた学生が多かった印象があった。要点を押さえて話されていたため、何が大事かが伝わりやすかった。授業中に、講義内容を教科書と連動させることで学生が後から、教科書のどこを振り返ればよいのかわかる道しるべになると感じた。
- 授業の導入として、新聞や雑誌など学生がメディアで見たことがあるような時事問題を取り入れて、学生の印象に残る授業を組み立ててみようと思いました。
- 教材を多数活用しておられて、授業にメリハリがありました。スライド、教科書の音読、ビデオ映像など、複数活用することで、学生も一つひとつに注目し集中できていたと思いました。どうしても講義では、教員が一方的に話す時間が長くなってしまうので、学生が声を出す、という時間帯も作っていくことが望ましいと思い、自身の授業にも活かしていこうと思いました。
- 学生の状態（メモを取っている時間など）を見ながら先生が授業をゆっくりと進めておられて、自身は学生がどのように講義を聞いているかを見ている余裕がなかったため、

その点も気をつけながら行っていこうと思った。また、それが学生とのコミュニケーションのひとつとなるのではないかと考えた。

2) 前期：「地域・在宅看護学演習～新町ハウスでのフットケア～（担当：普照早苗、梅津千香子先生）」

○学生が考えながら試行錯誤して演習に取り組んでいた様子が印象的でした。新町ハウスに初めて伺いましたので、そちらも感動しました。新鮮な気持ちで授業を受けられそうだと思いました。

○新町ハウスは初めてうかがいました。在宅そのものを思わせるような家で足浴演習をするという事は、実習室よりも対象者目線でのケアを考えることに繋がると思いました。学生たちは3名でいろいろ検討しながら工夫しており（畳に座るよりも椅子に座った方が姿勢が楽かもしれないとか）、こういう演習を慢性でもやれたらいいと感じました。生き生きとした学生の姿が良かったです。

○在宅療養者の看護をどのように実践するとよいのか、実際の「家」を利用した演習を行うことで、学生がイメージしやすいと思いました。準備段階から、住環境（和室やベッド、お風呂の場所）を意識することなど、在宅看護の特徴を学修するために有効であると思いました。

○実習室という教室で教科書通りの技術を練習するより、学生の記憶に残りそうだと思います。正しく技術ができるかも大切ですが、学生の思考力発想力という点にももう少し着目したいと思いました。

○今回足浴の見学行きたいと思ったきっかけは、病棟で足浴を実践するときにも基礎看護学実習室での実施方法・準備に偏り、対象者に合わせた工夫が少ないと感じたからです。しかし、学生は実際にはいろいろ考えて演習していましたので、病棟実習でも様々なケア方法を発想できるようにどう引き出していくかを再考してみます。ありがとうございました。

○実際の在宅療養の環境をイメージした演習が行えるという点で、退院支援の「退院前訪問」を学修する際に活用できそうであると考えました。

3) 後期：「社会福祉学概論Ⅰ（担当：坂口昌弘先生）」参加教員のアンケート内容

○カードゲームを活用しての演習授業は、とても新鮮でした。演習テーマである「貧困とソーシャルワーク」の導入として大富豪ゲームを使用するアイディアはとても斬新かつユニークであると思いました。

○トランプゲーム「大富豪」を利用した講義は学生の興味をひいて盛り上がり興味深かったです。「貧困」がゲーム勝ち負けの「個人要因」と「環境要因」と共通するという切り口で、どう深めていくのか、この後の演習へのつなぎ方についても興味があります。ただ、最近は学生世代にカードゲームをする習慣も少ないためか、進行にやや時間がかかっていたのが残念。何分までに終わって というようなマネジメントにしてもよいのかなと思いました。ソーシャルワーク演習はペーパーペイシェントが中心と聞いてい

ましたが、それらのケースの背景を社会経験の少ない学生にどのようにして想起させるのか興味がありましたので、今回の取り組みは学生の思考を刺激できてよいのかなと思います。

- トランプゲームという題材から、社会福祉に発展させて考えるという展開で、貧困の問題を身近なこととして捉えられるようになっていたと思いました。また看護学科と比較して少人数なのもあってか、学生同士が協力してグループワークをしている印象でした。資料を取りに行く・発表者を決めるなども、お互いに「お願い」「ありがとう」の声かけが自然に出ていることがとても心地よかったです。
- 2コマ続きの授業は本当に授業構成が難しく、学生を飽きさせない配慮がとても重要になってきます。KJ法やグループワークなどは演習だけでなく講義にも活用したいとあらためて思いました。
- 最近では、終末期ケア(ACP)での「もしばなカード」など、ゲーム形式で話し合いのきっかけにできる教材が増えてきているので、どのようなツールがあるのか常に情報にアンテナを張って授業に上手に取り入れてみたいと思いました。
- グループワークを講義で活用したいと考えているため、その方法や指示の出し方など活用したいと思いました。また演習科目であっても、どうしても講義に偏りがちなので、演習として成り立つように考えたいと思いました。

4) アンケート結果：今後参加したい授業について

- 講義になると学生がうとうととしている印象があるので、学生が楽しそうに受けている授業を見学してみたいです。
- 今回自分も初めて社会福祉学科の必修授業に参加させて頂きましたが、看護学科と社会福祉学科の互いの必修科目でどのような内容を学修しているのか、それぞれの学科教員が参加し、自身の学科の授業に内容含めて活かしていけるとよいと思いました。
- 基礎看護の科目を聴講したい、また分野が異なる先生方という点で社会福祉学科の先生の講義を聴講できるのはとても学びになると思った。
- 看護福祉学部以外の講義だけでなく、例えば一般教養科目や他学部の講義も是非拝見してみたいと思います。
- ペーパーペイシェントでのソーシャルワーク演習についても知りたいです。看護も医療施設内だけでなく地域との関りが重要視されているので、他職種他領域との科目は視野を広げる機会になってよいと思います。
- 特に希望はありませんが、公開科目には積極的に参加したいと考えています。貴重な機会をありがとうございました。

5) 今回の授業公開に関する反省点・今後の改善点

後期の授業に関して授業公開を実施したが、機器の不都合により、授業参加日に休講となったケースがあった。今後は、複数の候補日を設けることを担当教員と相談し、日程調整および環境調整を図っていきたいと考える。また、昨年度から授業公開科目の選定に当たって

次のような申し合わせを取り決めたが、スムーズに運用できたため、今後も、継続的・計画的に実施できるようにしたい。以下に、申し合わせの内容を、昨年に続き再掲する。

【FD 部会「授業公開」についての申し合わせ】（2023 年 11 月看護福祉学部教授会）

1. 「授業公開」科目の選定について

- ・毎学期、各部局で 2～3 科目を選定する。選定方法は、①希望者、②他者からの推薦で行い、教授会で看護学科・社会福祉学科それぞれの科目が最終選定される。
- ・FD 部会員から、FD 部会長に選定された科目を連絡する。

2. 「授業公開」対象科目担当教員の役割

- ・FD 部会員に、授業の日時と場所（教室）をお知らせ頂く。
- ・その他、特に事前準備等は不要。いつも通りの授業を実施する。
- ・参加教員に対して、要望や注意点などがあれば、FD 部会員に連絡する。

3. 「授業公開」対象科目に参加する教員の役割

- ・FD 部会員に、参加したい「授業公開」対象科目を事前に知らせ、当日参加する。
- ・授業進行に支障がないよう、参加教員からの要望や注意点を守り、聴講する。
- ・参加後、FD 部会員からメール配信された参加者用シートに以下の内容を簡潔に記載する。

「1. 授業に参加しての感想」

「2. 自分の授業等はどう活用していけそうか」

「3. その他」

これらの内容は、年度末の FD 報告書に部局別に掲載される（但し記載者名は公開されない）。

4. 備考

- ・FD としての「授業公開」の目的・目標にそって実施する（資料 1 参照）。
- ・上記以外の行為があった場合は、FD 部会員に知らせる。

以上

2.5 学術教養センター（石原一成）

2.5.1 授業評価アンケートの結果

今年度の授業評価アンケートは、昨年度に引き続き WEB 上で実施した。なお、2020・2021 年度は遠隔授業の負担が大きいと判断されたこと、また 2022・2023 年度においては個人情報の第三者提供に関する全学的な方針が明確でなかったことから、学術教養センターでは非常勤講師が担当する科目を対象外とし、専任教員が担当する科目のみを評価対象とした。

評価結果は、以下の図および表に示すように、全体としておおむね緩やかな上昇傾向を示しており、受講者の満足度が年々向上していることがうかがえる。特に 2024 年度においては、「Q5 総合評価」の平均値が 3.57 と、2023 年度に引き続き高い水準を維持しており、授業全体に対する満足度の高さが示されている。また、「Q2 授業方法」の平均値も 3.57 と高評価であり、教員による授業運営や進め方に対して、受講者が好意的な印象を持っていることがうかがえる。

一方で、「Q3 内容理解」の項目については、依然として他の項目に比べてやや低めの評価となっており、2024 年度においても 3.41 にとどまった。この結果は、授業の方法や雰囲気には一定の満足が得られている一方で、学生自身の理解の定着には課題が残されている可能性を示唆している。今後は、授業内容の難易度調整や学習支援の充実を通じて、理解促進に向けたさらなる工夫が求められる。

一般教育	2015年		2016		2017		2018		2019		2020		2021		2022		2023		2024	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
Q1 意欲的受講	3.27	3.26	3.31	3.29	3.32	3.30	3.34	3.36	3.39	3.39	3.42	3.38	3.42	3.42	3.43	3.43	3.49	3.46	3.48	3.46
Q2 授業方法	3.40	3.39	3.40	3.41	3.43	3.45	3.48	3.48	3.49	3.48	3.53	3.51	3.52	3.52	3.51	3.56	3.54	3.60	3.55	3.59
Q3 内容理解	3.22	3.20	3.23	3.23	3.25	3.27	3.31	3.28	3.33	3.36	3.31	3.28	3.30	3.31	3.33	3.35	3.39	3.41	3.39	3.44
Q4 関心	3.23	3.23	3.27	3.24	3.25	3.28	3.29	3.28	3.33	3.33	3.34	3.30	3.33	3.34	3.31	3.38	3.38	3.44	3.42	3.44
Q5 総合評価	3.43	3.40	3.44	3.43	3.44	3.46	3.49	3.50	3.51	3.50	3.59	3.57	3.58	3.58	3.56	3.64	3.61	3.68	3.62	3.67
Q9 遠隔システム活用															3.45	3.61	3.46	3.53	3.44	3.41
Q10 遠隔授業の効果															3.37	3.51	3.37	3.45	3.33	3.36

表 学術教養センターにおける 10 年間の授業評価アンケート結果の推移

（それぞれの質問項目の最高値を網掛けで示した）

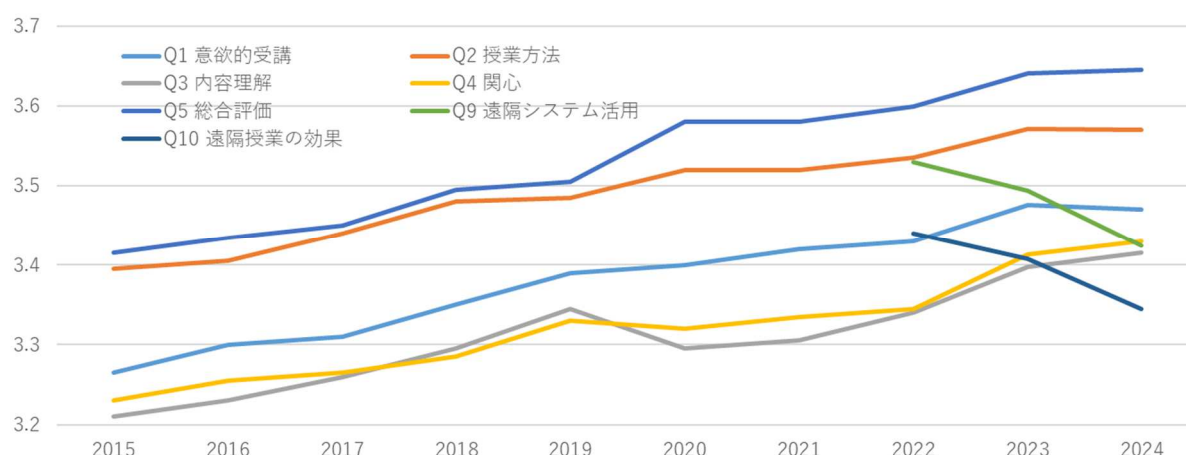


図 学術教養センターにおける 10 年間の授業評価アンケート結果の推移

（遠隔授業についての項目（Q9 および Q10）において、スコアの低下傾向が見られた）

2024 年度も、昨年度に引き続き基本的には対面授業を実施したが、一部の授業では遠隔授業や、対面と遠隔を同時に行うハイフレックス授業（対面と遠隔を同時に行う授業方式）が実施された。2022 年度に新設された「Q9 遠隔システム活用」（その授業で遠隔システムがうまく活用されていたか）および「Q10 遠隔授業の効果」（遠隔で行われた授業について学習効果があったか）の項目については、前期においてそれぞれ 3.44（全体平均 3.43）、3.33（同 3.33）、後期においては 3.41（同 3.48）、3.36（同 3.41）と、全体の平均値とほぼ同程度の結果であった。学術教養センターでは、他部局と比較して授業規模が大きい科目を多く開講していることを踏まえると、これらの結果は、各教員が遠隔授業に対して創意工夫を重ねてきた成果と評価できるだろう。

一方で、遠隔授業についていくつかの課題も明らかになった。導入初期である 2020 年度には、緊急対応のもとで遠隔授業が実施されたにもかかわらず、学生側の期待値が低かったこともあり、「Q9 遠隔システム活用」については比較的寛容な評価がなされていた可能性がある。しかし、2021 年度以降は遠隔授業が日常的なものとなり、学生の評価基準が次第に高くなっていった。その結果、より実践的かつ効果的な教育の実現が求められるようになり、「満足できない点」が年を追うごとに明確に認識され、評価が厳しくなっていると推察される。授業においては、Zoom や Google Classroom といったツールを「ただ使用する」のではなく、「いかに活用するか」、すなわち学びを促進する形での活用が求められている。

「Q10 学習効果」も同様に評価の低下が見られ、2024 年度には前期 3.33、後期 3.36 と、遠隔授業における学習効果を実感しにくい状況が続いている。これは、遠隔授業における「受動的な学習姿勢」「集中力の維持の困難さ」「相互作用の乏しさ」といった構造的課題が、依然として十分に解消されていないことを示していると考えられる。

今後は、学術教養センター（2025 年度より共通教育センターに名称変更）だけでなく、大学全体として遠隔授業の目的と効果を再定義する必要がある。遠隔授業は、単なる「対面授業の代替」ではなく、遠隔ならではの学びの価値（例えば、個別最適化された学習、反転学習、反復視聴の活用など）を重視した授業設計が求められる。

このように、遠隔授業に関する評価結果からは、導入初期の段階を経て、現在は「教育的成熟」のフェーズに差ししかかっていることが読み取れる。今後は、教員による授業改善に加え、組織的な支援体制の整備や学生の学習環境の強化といった全学的な取り組みが一層重要となる。その一環として、教室不足など制度上の課題への対応を個々の教職員の努力に委ねるのではなく、全学的に教務調整を行える体制の整備が求められる。

2.5.2 授業公開の方針と実績

学術教養センターでは、授業を常時公開としており、教員同士による授業参観が随時行われている。これまで、オムニバス形式の授業を開講し、担当教員が自分の担当回以外の授業も参観することで、授業方法に関する情報を共有し、授業改善への関心を高める取り組みを行ってきた。しかし、2025 年度からのカリキュラム改定に伴い、こうしたオムニバス授業は、2024 年度から廃止されることとなった。

授業参観

各教員が個別に授業参観を行い、授業方法について情報共有を行った。

参観した教員：長岡亜生

参観した授業 「英語特論」 デンマン先生：2週にわたって学生のスピーチ発表会に参加（7月9日、23日）

「地域社会とフィールドワーク B・C（地域資源開発実践）」 石丸先生：動画発表会（上映会）にオンライン参加（7月21日）

授業参観は、互いの授業のやり方を学び、それを相対化することで、自身の授業を改善するための良い機会となったと考えられる。

2.5.3 FD研修

2024年度は、授業方法の改善に関する以下のような講演会、シンポジウム等に学術教養センターの各教員が参加した。

オンライン意見交換会名：大学体育の将来を語る 2「Good Practice に学び、大学体育を拓く～STEM教育分野に関わる理工系大学の事例から～」

主催：公益社団法人 全国大学体育連合

開催日：2024年4月15日

場所：オンライン開催

参加教員：石原一成

内容：理工系学生の育成における体育教育の特色や課題を共有するとともに、他分野においても、文理連携を目指す大学教育や体育を通じた人間形成・人材育成に必要な取り組みについて検討した。

フォーラム名：体育・スポーツ・健康科学 学術フォーラム「スポーツにおける「公正」と「自立」の同時達成はいかに可能か？～スポーツ権の「これまで」と「これから」～」

主催：日本体育・スポーツ・健康学会、日本スポーツ体育健康科学学術連合

開催日：2024年6月15日

場所：ハイブリッド形式（対面会場：明治大学 駿河台キャンパス）

参加教員：石原一成

内容：文化権としてのスポーツ権の意味と意義を共有し、国際社会における権利保障のあゆみに学びながら、スポーツにおける「公正」と「自立」の同時達成を遂げるための課題と方向性について議論を行った。

講座名：科学的エビデンスから考える：頭と体をより良く育む生活習慣（講師：西脇雅人氏）

主催：大阪工業大学、大阪経済大学、摂南大学

開催日：2024年8月10日

場所：オンライン開催

参加教員：石原一成

内容：科学的根拠に基づいた生活習慣について、生活習慣は学業成績に影響するか、睡眠や食事で注意すべきこと、最新のトピックスで注意すべきことについて解説があった。

会議名：超高齢社会の課題を解決する国際会議

主催：日本経済新聞社

開催日：2024 年 11 月 25 日

場所：イイノホール&カンファレンスセンター／ハイブリッド開催（会場&ライブ配信）

参加教員：石原一成

内容：超高齢社会の課題解決には、高齢者支援だけでなく、全世代の生活の質を向上させる取り組みと社会・経済のイノベーション、少子化対策が必要であり、これらの課題について、世代を超えた包括的な視点から検討を行った。

特別講演名：日本のスポーツ政策の未来を考える

主催：日本体育・スポーツ・健康学会

開催日：2025 年 2 月 5 日

場所：JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 岸清一メモリアルルーム／ハイブリッド開催（会場&ライブ配信）

参加教員：石原一成

内容：日本のスポーツ政策には何が期待されるだろうか、またその政策にとって、スポーツ基本法はどのように更新される必要があるだろうか、という問いについて議論を行った。

フォーラム名：第 13 回大学体育スポーツ研究フォーラム

主催：公益社団法人全国大学体育連合

開催日：2025 年 2 月 28 日

場所：オンライン開催

参加教員：石原一成

内容：近未来的な体育教育の実践を考える（小中高と大学での実践事例）」をテーマに大学体育・スポーツ教育のより良い実践について議論を行った。

講演名：早稲田大学スポーツ科学部における初年次教育の改革—専門領域と融合したアカデミックスキルの教育—

主催：早稲田大学スポーツ科学部「初年次教育の改革」事務局

開催日：2025 年 3 月 13 日

場所：早稲田大学国際会議場／ハイブリッド開催（会場&ライブ配信）

参加教員：石原一成

内容：早稲田大学スポーツ科学部が 2023 年度に改革した初年次教育の内容を中心に、大学や企業、入学希望者を対象に、学生が受けている教育内容、専門と融合した初年次教育について解説があった。

2.5.4 授業改善の取組みと今後の展望

2024 年度は授業改善について以下のような取り組みが行われた。

科目名：哲学

担当教員：渡邊浩一

授業改善の取り組み：参加者間の議論がより深まるような資料作り・課題設定を試みました。今般のカリキュラム改変を踏まえて、講義科目でもゼミ的な運用ができるよう工夫を重ねていきたいと考えています。

科目名：学術ゼミ

担当教員：渡邊浩一

授業改善の取り組み：20～30 人の履修者がある中でも身のある文献購読・議論ができるよう、グループワークのファシリテーションに腐心しました。次年度以降の開講の目途が立たないので、展望は描けません。

科目名：大教室で行われた担当科目

担当教員：加藤まどか

授業改善の取り組み：テーマに関連する動画を視聴したり、新聞記事や当事者の声が掲載された資料を配布したりして、当該分野に対して学生が関心を持てるように配慮した。上記の試みは好評であったため、今後も継続して取り組んでいきたい。

科目名：英語Ⅱa

担当教員：ジャレット・デンマン

授業改善の取り組み：elicited imitation 形式のスピーキングテストを導入した。特定の基準に従って、学生が聞きとった英語を復唱することで、彼らの構文等に関する理解を正確かつ効率よく評価できると研究で示されており、採点した私もそれを実感した。今後も利用する予定。

科目名：心理学関係の担当科目

担当教員：清水聡

授業改善の取り組み：いくつかの科目において評価の材料として期末試験以外に、授業内で実施した自分の内面性に関する質問紙の結果について考察をおこなう小レポートを複数回実施した。これらの小レポートを有機的に活用したものを期末試験に盛り込めないかと考えている。

科目名：担当科目全般

担当教員：大石善隆

授業改善の取り組み：主体的に考える機会を増やすため、学生自らが「探求課題」を設定する機会を設けた。今後、より教育に効果的な課題を設定していきたい。

科目名：東洋思想

担当教員：亀田勝見

授業改善の取り組み：情報の更新と改善に加え、より見やすいスライド、および授業の理解度を高めることのできる小課題を模索した。

科目名：導入ゼミ

担当教員：亀田勝見

授業改善の取り組み：参加学生の理解度および授業没入度を促すためのよりよい教材・課題を追求した。

科目名：東洋思想および導入ゼミ以外の科目

担当教員：亀田勝見

授業改善の取り組み：2024 年度で終わったのでコメントなし。

科目名：2025 年度から担当する新科目

担当教員：亀田勝見

授業改善の取り組み：新たな大講義科目なので、「東洋思想」での経験を元に授業構成や教材の準備を行った。

科目名：導入ゼミ・教養ゼミ・学術ゼミ・神話学 他

担当教員：松本涼

授業改善の取り組み：導入ゼミは 39 名と例年より大幅に多い受講生、かつ教室不足のため情報演習室での授業となった。ディスカッションは難しいが、学生が常にパソコンを使えるため、オンライン資料を用いた講義や課題提出を多めに配置した。そのためか、全員が最終レポートの提出を期限内に行うことができた。

教養ゼミでは漫画『アンナ・コムネナ』を受講生自身が分析する授業を行った。最後にまとめを兼ねてビザンツ帝国史の専門家をゲストに招き、学生たち自身が考えたことを専門家との議論を通して精緻化する試みをおこなった。

学術ゼミでは『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』を講読した上で著者の 1 人を Zoom で招いた。ミーティングオウルの使用によりスムーズな会話が実現し、議論も盛り上がったため、講師と学生の希望により第 2 回も開催した。

科目名：担当科目全般

担当教員：森英樹

授業改善の取り組み：Google Classroom を活用した課題提出や教材提供により利便性を高めることを心掛けた。25 年度は一部クラスにおいて業者の e ラーニング教材を試行する。

科目名：英語 I・IIb、英語特論

担当教員：長岡亜生

授業改善の取り組み：学習効果を上げ、教室外での学習習慣が身につくよう、各授業でオンライン課題を課した。学生の理解度を把握でき、評価にも生かせるが、使用テキストが異なるため作成に手間がかかるのが難点である。なるべく自動採点できる課題を作成したが、今後は課題作成の効率化をさらに進めたい。授業内では、とくにアウトプットを重視し、学生同士での活動を取り入れ、学生の理解を促した。今後は新カリキュラム下で、大人数の授業に対応できるよう、これまでの取り組みを生かし試行錯誤で進めたい。

科目名：体育実技Ⅰ・体育実技Ⅱ

担当教員：石原一成

授業改善の取組み：教員がウォーミングアップや練習方法を提示する学習活動から、学生主体の学習活動に発展させていくよう配慮している。具体的にはチームごとに設定したその日のリーダーを中心にウォーミングアップ、チーム練習、グループワーク等の学習活動を行い、リーダーシップ、フォロワーシップ、サポーターシップについて考え、実践する機会を提供している。毎回、受講生は学習活動の記録（自己評価、次週の課題、戦術、学び、感想など）を行い、教員がコメント・アドバイスを記入しフィードバックを行い、双方向授業の基礎づくりを行っている。

その他の取組みとして、2021 年度には導入ゼミの授業改善を目的に、指導内容に必要な条件の検討を行った。その成果を踏まえ、2022 年度以降はガイドラインを作成し、指導内容の標準化を進めている。また、導入ゼミの教材については、LMS 上に共有サイトを設け、知識や情報を参照できる教材を集約・共有している。書籍教材は経済学部棟 10 階の事務室書架に配置し、担当教員がいつでも利用できるようにしている。さらに、導入ゼミ関連教材は「大学での学び補助教材サイト」として整理し、教員および学生の双方が参照できるようにしている。2025 年度に向けては、シラバスの共通化も行った。

2024 年度は基本的に対面授業が実施されたが、一部の授業では遠隔授業やハイフレックス授業も取り入れられた。これらの取組みの成果は、授業評価アンケートの結果からも読み取ることができる。授業評価アンケートは学生による主観的な評価であり、学生の学力が客観的に向上しているかどうかを直接示すものではない。しかし、数値の傾向からは、個々の教員による授業改善の取組みが着実に進められていることがうかがえる。

学術教養センターにおける FD の取組みは、初年次教育、外国語、体育、一般教育、教職といった広範な分野にわたって展開されている。その中でも特に、各分野が互いに参考にできる内容について情報を交換しながら活動が進められている点に、大きな特徴がある。また、どの分野においても、大学入学時の学生を対象とする授業であることから、その時々の入学生の特性や社会情勢を的確に把握し、それに応じて講義内容や運営方法を柔軟に修正・発展させていく姿勢が求められる。

2025 年度以降、現行の 1 単位科目は「予習・復習を重視した内容」とする 2 単位科目へと変更されることが決定している（授業担当者の意向が反映されたかどうかは別として）。一方で、1 単位あたりに求められる学修時間（45 時間：大学設置基準第 21 条）は変わらないため、「学生の授業外学修時間の増加」に向けた具体的な対策を検討する必要がある。これは、「単位の実質化」や「学位の質保証」に対する要請に加え、新カリキュラム導入による教員を取り巻く環境の変化（いわばリセット）への対応という側面も持つ。こうした状況を踏まえ、今後はより良い授業の実施方法を模索していくことが求められる。2024 年度の実践で得られた経験を糧に、新たな授業展開と教育の発展につながることを期待される。

学術教養センター（2025 年度より共通教育センターに名称変更予定）では、今後も教育の質の向上と継続的な改善に向けた検討を重ね、より良い教育環境の構築に努めていく。

2.6 情報センター（村田 知也）

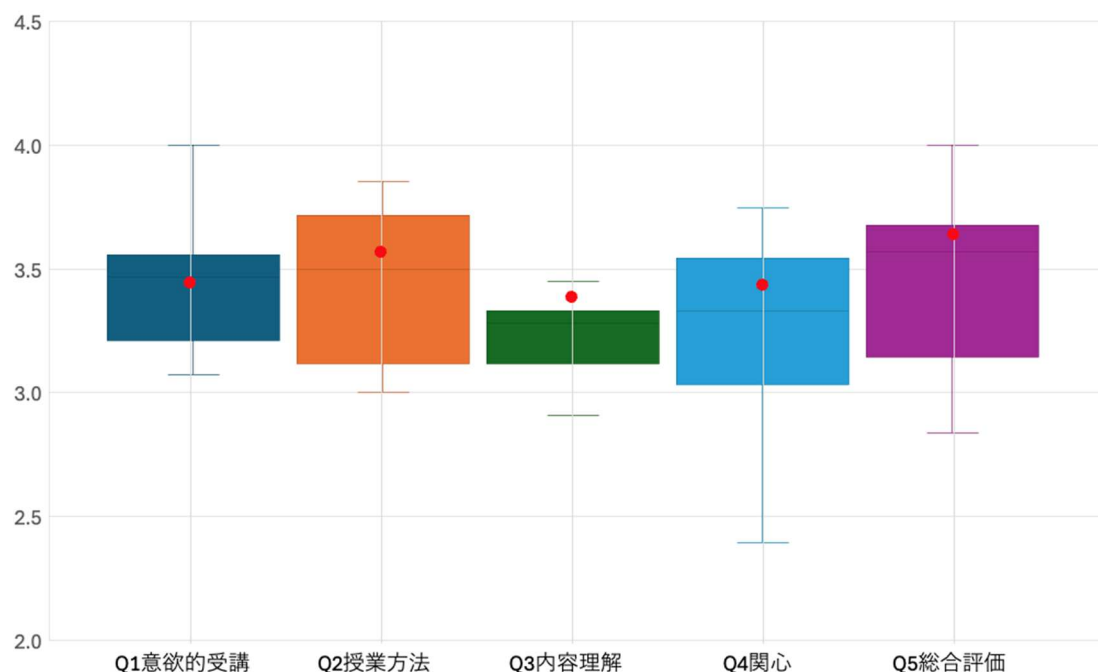
情報センターは令和5年4月に開設。令和4年度から「全学数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」を開始し、令和5年度から情報応用科目や数学科目を中心に構成される同プログラム（応用基礎レベル）を開始している。このうち、リテラシーレベルは、令和5年度文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」に認定され、令和6年度には応用基礎レベルが認定された。

また、このプログラムでは自己点検・評価を目的に、令和4年度から学生による授業評価を行っている。この評価に用いる項目と、FD部会で実施している授業評価アンケート（以下、FDアンケート）の設問が異なり、FDアンケートの回答結果の取扱いにも制限がある。そのことから、プログラムにおける自己点検・評価では、独自に情報センターで作成した授業評価アンケート（以下、数理・DS・AIプログラム評価アンケート）を実施している。

情報センター提供科目のうち、「全学数理・データサイエンス・AI教育プログラム」構成科目以外ではFDアンケートを実施している。以下では、まず、FDアンケートの結果について報告する。次に情報センターで実施した数理・DS・AIプログラム評価アンケートの結果を報告し、授業評価を行う（2.6.1）。また、FD活動（2.6.2）ならびに授業改善の取り組み（2.6.3）について報告する。

2.6.1 アンケート結果と授業評価

まずはFDアンケートの結果について報告する。対象となっている科目は前期が「情報基礎演習」、「物理学Ⅰ」、「情報処理B」で、後期の科目は「プログラミングE」、「情報処理E」、「物理学Ⅱ」、「情報科学Ⅱ」で有効回答数は481となった。以下に通年でのアンケート結果のグラフを示す。赤い丸は大学全体の平均の数値となっている。



FD アンケートによる授業評価の結果について以下に考察を述べる。

まず「意欲的受講 (Q1)」においては、情報センターの平均が 3.451 と、大学全体の平均値 3.45 と同じであり、学生が前向きな姿勢で授業に取り組んでいる様子がうかがえる。これは、授業内容や雰囲気が学生の学習意欲を引き出している証であり、非常に好ましい傾向である。一方、「授業方法 (Q2)」「内容理解 (Q3)」「関心 (Q4)」「総合評価 (Q5)」の 4 項目については、大学全体の平均値と比べてやや低くなったが、いずれの項目も 3.0 を大きく下回ることはなく、一定の水準を維持している。特に「授業方法 (Q2)」と「総合評価 (Q5)」は、中央値で見ると大学平均に近く、一部の学生からは高評価が得られていることが図から読み取れる。これは、授業内容や運営が一定の質を保っていることの表れであり、今後の改善によってさらに向上が見込まれる。

次に、情報センターで実施した数理・DS・AI プログラム評価アンケートの結果について報告する。このアンケートは以下の設問から構成される。

Q1. この授業を受講することにより、シラバスに記載されている授業目標は達成できましたか？*

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

Q2. この講義(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか？*

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

Q3. この授業についての方法（先生の講義の方法、話し方、資料の提示方法、学習支援システム・遠隔システムの活用など）は適切でしたか？*

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

Q4. この授業の内容は理解できましたか？*

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

Q5. この授業に関連する分野への興味や関心は高まりましたか？*

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

Q6. この授業を後輩学生等他の学生に勧めたいと思いますか？*

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

Q7. 総合的に判断して、この授業を受講してよかったと思いますか？*

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

習」、「数学基礎」、「代数学」、「統計学基礎」、「解析学」「プログラミング A」、「プログラミング C」、「メディア情報処理概論」、「情報処理 D」の 11 科目である。応用基礎レベルにリテラシーレベル構成科目を含むことから、以下の表に応用基礎レベルの全体結果を示す。有効回答数は 513 である。

ここでは、選択肢は異なるが、FD アンケートと類似する設問の結果を中心に考察する。

まず、「意欲的受講 (Q2)」の項目で、3.25 と安定した評価が得られており、学生が学ぶ意識を持って授業に取り組んでいたようで、特に「後輩への推奨度 (Q6)」が 3.13 と一定の評価を得ている点からも、授業に対して肯定的な印象を持っている学生が少なくないことがわかった。また、「授業方法 (Q3)」は 3.31 という結果となり、授業の進行や説明の仕方に対して好意的な評価が得られている。これは、教員の丁寧な説明や、授業の工夫が学生に届いていることを示している。さらに「遠隔システムの活用 (Q8)」と「遠隔授業の効果 (Q9)」についても、それぞれ 3.46、3.36 と大学全体平均 (3.48、3.41) に近い水準が得られ、オンライン環境でも支障なく授業が提供されていたことを示されており、対面授業を Zoom で同時配信するハイフレックス型授業に対して、「遠隔授業への対応が素晴らしかった」、「遠隔と対面があることで、自分にあった方法で受講できてよかった」という意見が多く見られた。「内容理解 (Q4)」と「興味・関心 (Q5)」については、平均としてはやや控えめな数値 (それぞれ 3.00、2.98) となったが、これは学生の学びに対する真剣な姿勢が反映されたものであり、より深い理解や興味を求める声として前向きに捉えることができ、「計算の問題で、例題があって分かりやすかった」や「難しい課題もあったけれど、コメントの説明をしてもらえたので分かりやすかった」といった意見があり改善される方向に向かっていることがわかった。

「総合評価 (Q7)」では 3.30 と、授業全体に対する一定の満足感が得られていることが確認されました。これは、内容や方法に対して多様な意見がある中でも、授業を通して「学べてよかった」と感じている学生が多かったことを示している。全体として情報センターの科目は、学生にとって学ぶ楽しさや意欲を育むきっかけとなっていることが、今回の結果から読み取れた。今後は、学生の理解をさらに深め、興味・関心を引き出すための工夫を加えることで、より魅力ある授業へと改善していき、学生の声を大切にしながら、これからも充実した学びの時間を提供できるよう努めたい。

2.6.2 FD 活動

情報センターで今年度を実施、参加した FD 活動を以下に挙げる。

・富山大学 数理・データサイエンス・AI 教育シンポジウム 2024

「PBL 教育でのデータサイエンス活用の現状と課題」

日程：2024 年 5 月 15 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：富山大学

参加教員：徳野 淳子

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム」関東ブロック

2024 年度第 1 回ワークショップ「データサイエンス・AI 教育の高大接続」

日程：2024 年 6 月 3 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム 関東ブロック

参加教員：徳野 淳子

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム」中国ブロック

第 1 回シンポジウム「高校、大学での数理・データサイエンス・AI 教育強化の取り組み」

日程：2024 年 7 月 12 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主 催：数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム中国ブロック広島大学

参加教員：徳野 淳子

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム」北信越ブロック

第 4 回シンポジウム「ダイバーシティ×数理・データサイエンス・AI 教育

～多様な数理・データサイエンス・AI 人材の育成に向けて～」

日程：2024 年 8 月 23 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：北信越ブロック代表校 金沢大学数理・データサイエンス・AI 教育センター

参加教員：徳野 淳子

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム中国ブロック

第 2 回コンソーシアム中国ブロックワークショップ

「社会人リスクリテラシー・リカレント教育の取組み～enPiT-Pro-Emb のその後～」

日程：2024 年 10 月 4 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主 催：数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム中国ブロック

参加教員：徳野 淳子

・福井県大教員の教育研究業務を激減させる生成 AI 活用セミナー

日程：2024 年 12 月 12 日、12 月 13 日

場所：福井県立大学の対面、Zoom によるオンラインでの開催

主催：情報センター

主催者：村田 知也

参加教員：徳野 淳子、眞田 嵩大

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム北信越ブロック
第5回シンポジウム

「人文・社会科学系 応用基礎レベル モデルシラバスと取組事例の紹介」にて本学の「全学数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（応用基礎レベル）」の事例紹介を行った。

日程：2025 年 2 月 10 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：北信越ブロック代表校 金沢大学数理・データサイエンス・AI 教育センター

参加教員：徳野 淳子

・数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム 2024 年度総会

日程：2025 年 3 月 10 日

場所：Zoom によるオンライン開催

主催：東京大学数理・情報教育研究センター

参加教員：徳野 淳子

2.6.3 授業改善の取り組み

2024 年度は授業改善について以下のような取り組みが行われた。

科目名：情報基礎演習

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取り組み：学生の能力差や受講環境の違いを意識して授業を進めた。また、新たに生成 AI の利活用方法や利用上の注意点を学ぶ教材を作成し、ChatGPT を使った演習やその結果をグループで議論する機会を設けた。

科目名：情報科学 I

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取り組み：各回の学習内容に関するミニッツペーパーや單元ごとのオンラインテストを実施し、学生の理解が深まるように工夫した。また、県内企業の方をゲストスピーカーとしてお招きし、個人情報保護や著作権、生成 AI やフェイクニュース、災害時のインターネット活用等について最新の話題や具体的な事例を交えながら講義を行っていただいた。

科目名：情報科学 II

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取組み：授業の中で「IT パスポート」の過去問題を解き、学生自身がその場で解答の正誤を確認し、正答率の低い問題を中心に解説するなど、学生の理解が深まるように工夫した。

科目名：情報処理基礎演習

担当教員：徳野 淳子

授業改善の取組み：例年学生の事前知識や能力によって作業進捗に差が見られるため、自分で演習が進められる学生はオンデマンドで、不慣れな学生には質問の時間が多くとれるように、対面／Zoom／オンデマンドの3形態で実施し、各受講生が受講しやすい方法で受講できるようにした。

科目名：代数学・解析学・統計学基礎

担当教員：田中 武之

授業改善の取組み：授業時間内に課題演習の時間を設け、個別に質問対応にあたるなどして、各回の授業内容が身につけられるように配慮した。定理の解説にあたっては、できる限り具体的な数値例を用いて、過度に話が抽象的にならないようにした。数式の計算過程の説明では、どうしても板書による説明が必要になるので、見やすい板書になるよう、常に自己チェックしていきたい。

科目名：プログラミング A

担当教員：眞田 嵩大

授業改善の取組み：講義資料を Markdown 形式で記述し、GitHub リポジトリの形で配布した。Markdown はプログラムやテキストを扱う文書形式であり簡潔で見易いため、講義資料として適した形式だと考えている。また、各自でプログラムを書く演習をこまめに作ることで、実際にプログラムを手で動かす感動を味わえるようにした。

科目名：情報処理 D

担当教員：眞田 嵩大

授業改善の取組み：Google Colaboratory を用いて、プログラミング環境構築の手間をかけずに人工知能プログラミングができるような教材を作成した。数式だけではなく、視覚的なイメージを重視し、学生が自分が今何をやっているのかがわかるように工夫した。

ファカルティ・ディベロップメント報告書2024

発行年月 2025 年 3 月

編集・発行 福井県立大学FD部会